

令和3年度(2021)


和歌山県
地域医療支援センター

夏 季 実 習 報 告 書



和歌山県
地域医療支援センター
CMSC
COMMUNITY MEDICAL SUPPORT CENTER

www.cmssc.jp/



令和3年度

和歌山県地域医療支援センター

夏季実習

報告書

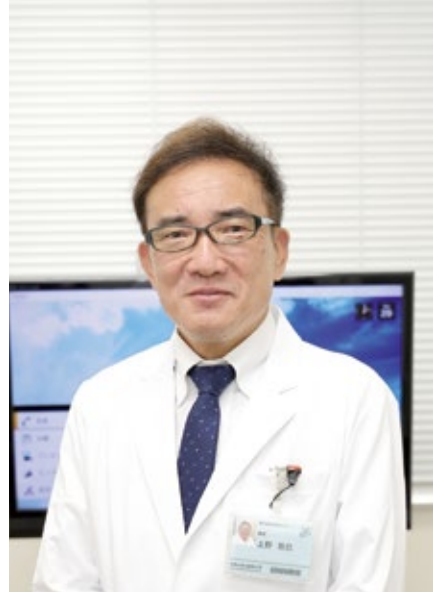
Contents

● ご挨拶	2
● 実施項目	3
● 病院・診療所実習	5
● 保健所実習	73
● 実習を終えた学生からの感想	98

ご挨拶

和歌山県立医科大学地域医療支援センター センター長・教授
和歌山県地域医療支援センター センター長

上野 雅巳



平成23年度から実施している夏の病院実習につきましては、平成25年度から本学医学部地域医療枠学生と和歌山県出身の自治医科大学医学部学生、また、平成27年度からは近畿大学医学部和歌山県地域枠学生の実習希望者と共に合同実習という形で行っております。令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となりましたが、今年度につきましては、他大学学生との合同実習とはなりませんでしたが、本学医学部地域医療枠学生が県内の医療機関において実習を実施しましたことをここに報告できますことを大変嬉しく思います。

令和2年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、大学講義の大半が遠隔講義を余儀なくされていますが、教育活動については、健康管理、感染対策を徹底の上、最大限可能な限り対面による学習や実習の機会を提供していくことが重要であると考え、本実習を企画致しました。

ご協力いただきました県内各病院・診療所、保健所、大学の先生方及びスタッフの方々には、コロナ禍でご多用のところご無理を申し上げましたが、多大なるお力添えをいただき、本学学生に貴重な経験をさせてくださったことを深く御礼申し上げます。

今年度につきましても、本学医学部地域医療枠学生が卒業後、勤務する予定の県内各病院・診療所や保健所での実習を通して、地域医療の現状を知って理解を深めてもらうこと、学生たちが様々な手技を体験すること、また他学年や先輩医師との交流の場を設けることなどを目的として実習を実施しました。

本学医学部地域医療枠3～5年生は、主に本学地域枠出身の先輩医師の指導の下に県内公的病院・診療所で2日間の実習を行い、地域医療の実際の現場に触れることができました。1年生につきましては、平成29年度から保健所にご協力をいただいております、保健所で1日間の実習を行いました。医師を志す者として地域における保健所の役割や仕組みを学び、様々な視点から地域医療等について理解を深めることができましたと思います。

実習終了後には本学医学部地域医療枠学生・医師を対象としたオンライン講演会及び交流会を実施しました。自治医科大学出身の見坂恒明先生にご講演いただき、論文作成についての意欲向上と知見を深めるとともに、他学年や先輩医師との交流も深まりました。交流会では、実習内容を共有することや先輩医師からの貴重なお話を聞くことにより、医師としての将来像がより鮮明になったかと思えます。

このような実習や交流会を通して、学生たちが互いに刺激し合い、共に高め合い、本県の地域医療を担う立派な医師へと成長してくれることを心より願っています。

私たち地域医療支援センター教職員一同、今後も学生たちが安心して卒業後の勤務に臨めるよう、サポート体制などの環境作りに取り組んでまいりたいと思います。

実施項目

○ 実習の目的

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠学生が、県内へき地医療拠点病院や保健所等の医療現場で実習・見学を行い、医師を志す者として地域医療の魅力や特性を理解し、地域医療に従事する医師の役割及び責任についての認識を深めることを目的とする。

○ 参加者

- 和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生 10名
- 和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3～5年生 27名 計37名

○ 実習日程

〈保健所への実習〉

令和3年7月30日(金)～8月19日(木)の1日間

〈へき地医療拠点病院等への実習〉

令和3年7月27日(火)～8月20日(金)の2日間

○ オンライン講演会・交流会

〈日 程〉 令和3年8月21日(土) 18:00～19:00

〈講 師〉 神戸大学大学院医学研究科 地域医療支援学部門 特命教授

兵庫県立丹羽医療センター 地域医療教育センター長 見坂恒明先生

〈内 容〉 ①「オールインワン経験症例を論文発表するTips基礎編」をテーマとした見坂先生による講演会

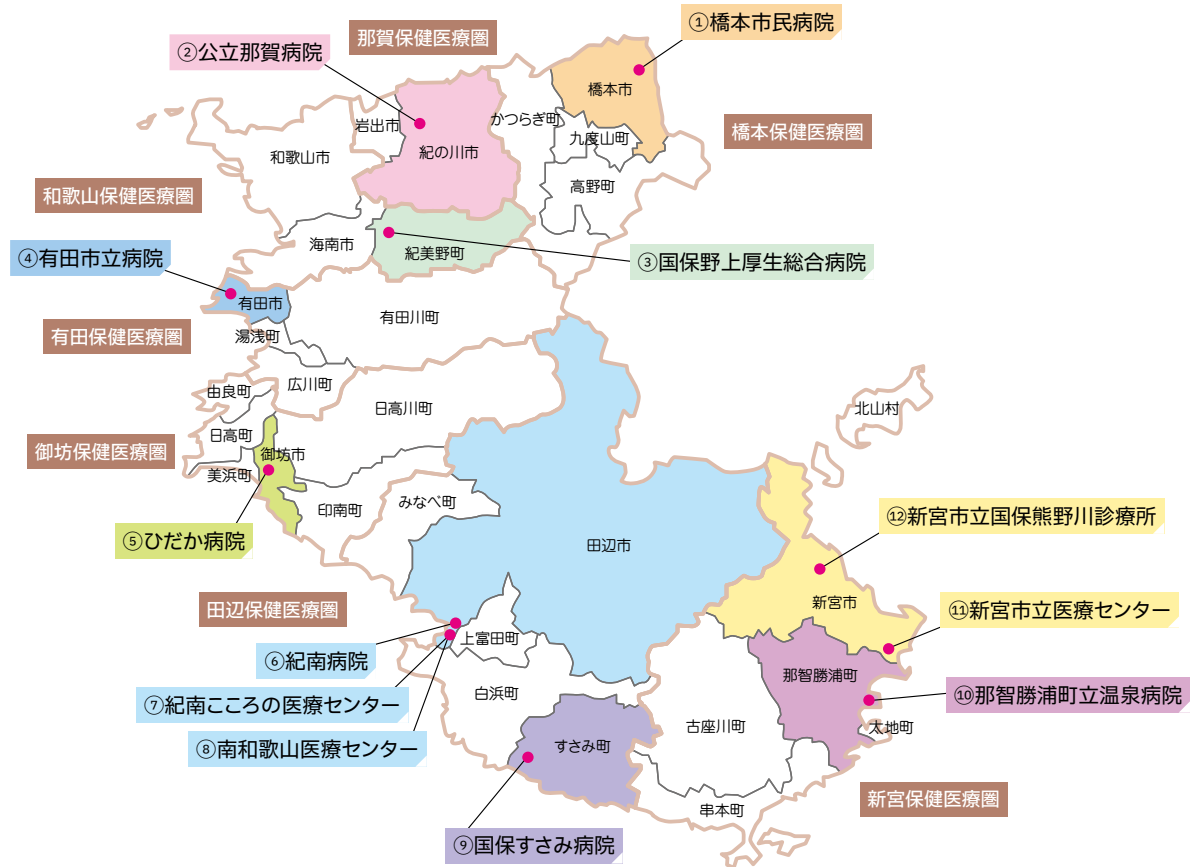
②学生・医師混合の4人1グループによる交流会(10分×2回)

〈参加者〉 計48名

病院・診療所実習

〈病院・診療所実習〉

令和3年7月27日(火)～8月20日(金)の2日間、地域医療枠3～5年生(計27名)が県内12か所の病院・診療所に分かれて実習を行いました。今年度は、主に本学地域枠出身の先輩医師のご協力の下、1対1でご指導をいただきながら、卒業後勤務する予定であるべき地医療拠点病院等での仕事内容について学び、地域医療についての理解を深めることができました。



●参加者名簿

実習先	学年	氏名	対応医師名
①橋本市市民病院	3年	浦崎 杏	宮井 優先生
②公立那賀病院	5年	泉 裕太	佐藤 孝一先生
	5年	荒木 彩加	小瀬川真美先生
③国保野上厚生総合病院	4年	高橋 文太	鴻谷 浩武先生
	3年	井上 弘康	濱 裕也先生
	5年	野久保翔太	井上 慎吾先生
④有田市立病院	4年	田中 利佳	深海 三恵先生
	3年	和田 愛梨	永井 早紀先生
	5年	高橋 翠	今村 沙梨先生
⑤ひだか病院	4年	井上 涼介	谷河 育朗先生
	3年	西村 加奈	西村 美咲先生
⑥紀南病院	4年	田中日向子	竹中 雅子先生
	4年	行岡 翼	大橋 豪先生
	3年	山下 光	奥村 晃平先生

実習先	学年	氏名	対応医師名
⑦紀南こころの医療センター	5年	村田 七海	木下恵利加先生
⑧南和歌山医療センター	4年	三並 桃佳	今地美帆子先生
	4年	板谷 耀平	野田 幸治先生
⑨国保すさみ病院	3年	淵脇 颯太	角野 直央先生
	3年	濱田琳太郎	中 暁洋先生
⑩那智勝浦町立温泉病院	5年	貴田 理香	出口 啓子先生
	5年	小西 朋樹	中西 宥介先生
	5年	松本 和樹	兼久 亮先生
⑪新宮市立医療センター	4年	塩塚 諒	山本 章先生
	3年	岩田 拓巳	加山 雄大先生
	3年	北畑 亮歩	川口 敬士先生
⑫新宮市立国保熊野川診療所	3年	山路 千咲	岩橋 真子先生
	5年	谷地 晃	川端 大輝先生

1 橋本市民病院



■ 位置 >> 和歌山県橋本市小峰台2丁目8-1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生

浦崎 杏

1. 実習施設とその地域の概要

本実習は、和歌山県橋本市にある橋本市民病院で行った。和歌山県橋本市は和歌山県の北東端に位置する人口約6.2万人を誇る市であり、大阪都心部へ約40分という立地でありながら歴史的、文化的資源に恵まれた自然豊かな土地である。65歳以上人口は約2万人であり、高齢人口比率は約32%と、和歌山県の市町村の中では比較的高齢化率の低い市である。

橋本市民病院は和歌山県橋本市の中核病院として急性期医療の中心的役割を担う病院であり、病床数は300床、診療科は総合内科、血液内科、消化器内科、呼吸器内科、腫瘍内科、代謝内科、循環器内科、小児科、外科、乳腺外科、整形外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓血管外

科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、放射線科、麻酔科、リハビリテーション科、歯科口腔外科、病理診断科、救急科からなる。

2. 実習内容

実習内容は1日目、2日目ともに病棟業務の見学をメインに行った。

まず1日目は病院到着後、病院案内をしていただき、手術室やHCUなど普段は入ることのできない場所の見学をした。その後、総合内科の橋本先生の病棟業務の様子を見学した。次に診察する入院患者一人一人の容態を分かりやすく説明して下さったため、理解しながら見学することができた。回診の途中で、ある患者さんの容態が急変し、気管挿管をする様子も見学でき、その際に呼吸のサポートの手伝いなどもさせていただいた。総合内科でこのように急変することは稀なことだと先生が仰り、2日間しかない実習でかなり貴重な体験をできたと感じた。

2日目は主に呼吸器内科の宮井先生に担当していただき、宮井先生の病棟業務の様子を見学をした。回診をする前に行われる朝のカンファレンスにも参加させていただき、患者さん一人一人の容態や今後の治療方針などについて話し合っている様子を見学した。カンファレンスでは内容が難しく分からないこともあったが、回診前にそれぞれの患者さんについてもう一度分かりやすく説明して下さり、容態だけでなく患者さんの性格やエピソードなども教えて下さったため、楽しい気持ちで見学することができた。回診時には実際に患者さんの呼吸音を聴く機会があり、正常な音と異常な音の違いを聴くことができ、とても貴重な体験ができた。

3. 考 察

今回の実習では主に病棟業務の見学をさせていただき病棟業務の実態について学ぶことができた。医師が患者さん一人一人に向き合っていると、患者さんも先生を信頼しているように見えたことが印象的だった。また、看護師さんと情報を共有している様子も見られ、やはり医療はチームで行われるものであると改めて認識した。また、2日間を通して研修医の先生と接する機会も多く、研修医も一人の立派な医師として信頼されており、研修医の先生自身が自信を持って医療に携わっている様子が印象的で、魅力的であった。

4. 謝 辞

この度は、2日間に渡り大変貴重な体験をさせていただき、誠にありがとうございました。先生方の貴重なお時間をいただき、仕事内容だけでなく社会のことも教えていただき、私にとって大変有意義な時間を過ごすことができました。医学知識が乏しい状態での実習であったため不安な気持ちもありましたが、私にも分かるように説明していただき、また見学だけでなく実際に呼吸音を聴かせていただく機会なども設けて下さったため、貴重な時間を過ごすことができ、2日間を通して多くのことを学びました。また、ご担当くださった宮井先生、橋本先生

のお仕事をそばで拝見し、私もいつか先生方のように患者さんだけでなくさまざまなところで気を配ることのできる医師になりたいと強く感じました。病院実習を終えて、地元である橋本市の中核病院である橋本市民病院の素晴らしさ、そこで働く先生方の患者さんに向き合う姿に魅力を改めて感じ、卒後地域医療枠の医師として貴院で働きたいという気持ちがより一層強まりました。宮井先生や橋本先生のような医師になることを目指して、今後も学業に励んでまいります。2日間、ありがとうございました。

2 公立那賀病院



■ 位置 >> 和歌山県紀の川市打田1282

和歌山県立医科大学医学部地域医療卒5年生

泉 裕太

1. 実習施設とその地域の概要

今回の実習では、紀の川市打田に位置する公立那賀病院に伺った。紀の川市は、平成17年に紀の川流域の5町が合併して誕生した。面積は228.21km²あり、北に和泉山脈、南に紀伊山地があり、その間に貫流する一級河川で市名の由来である紀の川と南から合流する貴志川の周囲に広がる自然豊かな町である。温暖な気候と紀の川がもたらす肥沃な土壌を利用した、野菜、果物など多種多様な農作物を生産している。農業産出額全体では和歌山県内1位を誇り、「あら川の桃」をはじめ、はっさく、いちじく、柿、キウイフルーツ、いちごなど四季折々の果物が収穫できる全国有数の果物産地である。さらに充実した加工品も数多くあり、安心と本物にこ

だわった品質で高い人気を集める。近年では、2014年の京奈和自動車道の開通により、奈良県・京都府へのアクセスが改善され、2017年には京奈和自動車道と阪和自動車道が直結し、アクセスがさらに向上している。また、本学の校章にもなっているチョウセンアサガオ（曼荼羅花）を用いて世界初となる全身麻酔での乳がん摘出手術を成功させた華岡青洲の生誕の地でもある。

昭和23年に開設された公立那賀病院は、一般病床300床（重症個室5床、特別室3床、個室74床、HCU11床、3人室15床、4人室192床）、感染症病床4床を有する。内科、外科、救急科をはじめとした28の科をもつ総合病院であり、現在は新型コロナウイルス感染症患者専用の病棟も設けており、入院を受け入れている。放射線照射装置や、血管撮影装置、MRIなどの最新機器も導入されており、救急対応も24時間体制で、非常時にはヘリコプターの離着陸も可能である。

2. 実習内容

実習では、2日間を通して呼吸器内科の佐藤先生にお世話になった。

初日はまず、病院内の紹介をしていただいた。前述のとおり、現在は新型コロナウイルス感染症患者の専用病棟があり、感染の危険に応じてレッド、イエロー、グリーンのゾーン分けが行われていることなどをお聞きした。医療物資の都合でグリーンゾーンにのみ立ち入ったが、PPE（個人用防護具）の装着や専用病棟内は順路に従って進むことなどを学んだ。その後は、コロナウイルス以外の入院患者の回診に同行させていただいた。誤嚥性肺炎を繰り返している方や、肺真菌症の方がいたが、普段の大学病院での実習で接している患者さんに比べると比較的緩徐な経過の方が多かった印象であった。その後、外来診療を見学した。午後からは、気管支鏡検査の見学をさせていただいた。気管支鏡検査にもさまざまな手技があり、気管支生検や気管支肺胞洗浄（BAL）、気管支腔内超音波断層法なども行われるという。BALでは、末梢の気管支肺胞領域に生理食塩水の注入と回収を繰り返し、洗浄液中の細胞を調べる。腫瘍細胞が確認されることもあれば、好中球の上昇による急性間質性肺炎や細菌性感染症の発見、リンパ球上昇に加え、CD4、CD8陽性細胞の比によって、 $CD4 > CD8$ では過敏性肺炎、 $CD8 > CD4$ ではサルコイドーシスを発見など、さまざまな疾患の発見に役立つと学んだ。検査後にはカンファレンスに参加させていただいた。本来は総回診があるそうだが、コロナウイルスの影響で病棟内を回ることはなく、検討患者について外来診察室で医師が集まって相談するという形式になっていた。

2日目は朝から外来見学をさせていただいた。非結核性抗酸菌症や画像検査にて肺野に陰影が見られた患者さんが来られた。ここでも、ポリクリ中に大学病院で見学する外来に比べて治療介入を急ぐような患者さんは少なく感じた。また、病棟にて血液ガス分析用の動脈血採取を見学させていただいた。午後からは再び入院患者の回診に同行した。途中、骨転移もしている患者の癌性疼痛に対するトリガーポイント注射による疼痛制御を見学させていただいた。筋性、

筋膜性の疼痛に作用すると考えられており、痛いと訴えのある箇所に対してブロック注射を行うことで鎮痛作用が得られていた。最後に、発熱外来前にてPPEの着脱手順について教わった。コロナ禍で装着する機会も多くなっているとのことで、学生として直接関わることは多くはないかもしれないが、参考となった。

3. 考 察

疾患や治療についても学習させていただいたが、5年生になり普段から行っている大学病院での実習と比べて、外部の病院との違いを特に実感した。まず、大学病院では術後の退院や転院のペースが早く感じるのに比べ、患者の生活状況などを考慮して少し余裕を持っているように感じた。決して大学病院での対応が不十分ということではなく、疾患以外の問題に対して、より深く寄り添うというのが地域医療なのだと思った。そういった点では、コロナウイルスに対する予防接種の会場としても機能しており、地域の医療全体を担っていると考えられる。過去に実習で伺ったことのある入院病床を持たない診療所に比べれば規模は大きいですが、紀の川市とその近辺の医療全体を引き受けるような体制である。また、大学病院では医局が各科で完全に分かれており、連携を取るにも学内でのメールや電話でのやりとりが必須であるが、那賀病院ではひとつの医局に全科の医師が席を寄せ合っていた。外来診察室も他の部屋と繋がっているため、医師同士の連携が取りやすく質問や相談もしやすい環境であると感じた。専門性がある以上、分からない分野をすぐ相談することができる環境は医療の質の向上につながると考えられる。コロナウイルス対応で、普段とは違った部分もあるのかもしれないが、新鮮であり、かつ重要な学習のテーマとなった。

4. 謝 辞

この度、お世話になりました公立那賀病院の佐藤先生をはじめ、呼吸器内科の先生方、病院職員の方々には、貴重なお時間を割いていただき、感謝申し上げます。コロナ禍で、感染患者の受け入れもあり、大変お忙しい中であつたと思いますが、疾患や検査についての知識や、那賀病院での働き方など様々なことを勉強させていただきました。学んだことを、学内での実習や今後医師となって働いていく上でも、活用していきたいと思っております。2日間ありがとうございました。

3 国保野上厚生総合病院



■ 位置 >> 和歌山県海草郡紀美野町小畑198

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生

荒木 彩加

1. 実習施設とその地域の概要

国保野上厚生総合病院は昭和24年現在と同じ地でスタート、昭和53年4月「へき地中核病院」として指定を受け、診療圏内2カ所の診療所に医師、看護師、薬剤師を派遣している。平成10年の本館竣工に伴い、順次CT、MRI等の高性能の医療機器も買い換え、診療科は内科、整形外科、神経精神科、眼科、泌尿器科の各科に常勤医師を配置している。各種介護保険事業も積極的に取り組んでおり、地域住民の医療・保健・福祉に貢献している。

また、位置としては和歌山市、海南市、紀美野町の2市1町からなる和歌山保健医療圏に属している。和歌山保健医療圏の医療提供体制の特徴として、全県の約半数の病院が和歌山保健

医療圏内に所在、とりわけ和歌山市内に病院が所在することが挙げられ、県内における医療資源が集中している現状である。つまり和歌山保健医療圏内の自己完結率は主要疾病・事業において総じて高く、大病院が複数所在していることも相まって、県外も含めた周辺圏域からの患者流入の受け皿としての役割を果たしている。具体的には、特定機能病院かつ高度救命救急センターである和歌山県立医科大学附属病院及び、高度救命救急センターである日本赤十字社和歌山医療センターが和歌山市内に所在し、全県的な高度急性期機能を担っている。海南市内及び紀美野町内に所在する6病院のうち5病院は海南市内中心付近に所在しているが、国保野上厚生総合病院だけは紀美野町西部に立地し、へき地医療拠点病院として紀美野町及び海南市東部の地域医療を担っている。それに加えて紀美野町内のへき地診療所（6か所）も、へき地における地域医療を担っている。当該へき地診療所のうち4か所に対しては国保野上厚生総合病院から医師が派遣されるとともに、残る2か所のへき地診療所においては常勤医が確保されている。このように医療を安定的に提供できるようにした上で、今後も高齢化していくへき地住民の交通手段の状況なども勘案しながら、遠隔診療を推進したり在宅医療のサポート体制を充実させていくことで、住民の医療ニーズに対応していく必要があるとされている。

2. 実習内容

2日間ともに指導にあたってくださった先生が救急当番の日であったため、主に救急外来を見学させていただいた。国保野上厚生総合病院は二次救急医療機関にあたり、初期救急医療機関からの転送患者を含め、緊急の手術や入院治療を必要とする重症救急患者に対処している。本実習中、救急隊により搬送されてきた患者さんで緊急疾患があった方はいなかったが、虫刺されなど普段の大学病院での臨床実習では見ない症例もあり、大変勉強になった。

また、今回初めて発熱外来を見学させていただいたが、一般の外来とは別の場所で診療することに加え、マスク、フェイスシールド、ガウン、手袋の着用といった万全の感染対策をとっており、コロナウイルスの院内持ち込みを阻止するという機能を果たしていることを実感した。その他、朝の回診に同行させていただいたり、その中で精神病棟も見学させていただいた。神経精神科では精神療法および薬物療法を中心とする治療を行っており、必要に応じて心理検査や臨床心理士による心理療法も行うことがあるとのことで、多職種による精神科リハビリテーションが充実していると感じた。

3. 考 察

全体を通して特に思ったことは、地域医療を行う上で診断学がとても重要だということだ。まず診断をしなければ治療することができないことから、地域医療を行える臨床能力には必要不可欠なものであると考えた。普段教科書などで勉強していると、まず疾患名が出てきてそれ以降に症候や身体所見などの特徴が記載されているため、患者さんの主訴からたくさんの鑑別

疾患を挙げ、診断を絞っていくことは普段とは真逆の順序で大変難しく感じてしまう。今回の救急外来見学で、先生が一通り所見をとって必要な検査をオーダーした結果を見て診断を決めるという過程を目の当たりにし、苦手とはいえ勉強と経験を重ね、自分自身もしっかりとした臨床能力をつけなければならないと身が引き締まった。

4. 謝 辞

この度はお忙しい中、貴重な研修をさせていただきまして誠にありがとうございました。コロナ禍となってから外病院を見学させていただくのは初めてだったので、特に救急外来・発熱外来では新たな発見もあり、興味深く学ばせていただくことができました。将来、同じ地域で働いていく自分としましては、その地域の現状を実際に見て学び、働く意志を強められたこと、また同じ地域医療枠出身の先輩と直接お話できたことは、大変大きな収穫であったと思います。丁寧なご指導をいただき、本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生

高橋 文太

1. 実習施設とその地域の概要

今回、実習でお世話になった国保野上厚生総合病院は、診療圏を和歌山県北東部としており、紀美野町と海南市の境に位置する和歌山県の中核病院である。紀美野町は総人口8,099人、面積128.34km²で過疎地域とされている(図1)。町内に鉄道は走っておらず、公共交通機関はJR海南駅から紀美野町の登山口までをつなぐバスのみとなっている。

本病院の紹介をする。許可病床数は、一般病床100床(うち地域包括ケア病床57床)、療養病床54床、精神病床100床となっている。診療科は内科、整形外科、神経精神科、眼科、泌尿器科(図2)の各科に常勤医師を配置している。特色は、地域連携室の充実と拡大をはかり、医療、介護施設間のスムー



図1 県内の過疎地域(「和歌山県一全国過疎地域連盟」より)

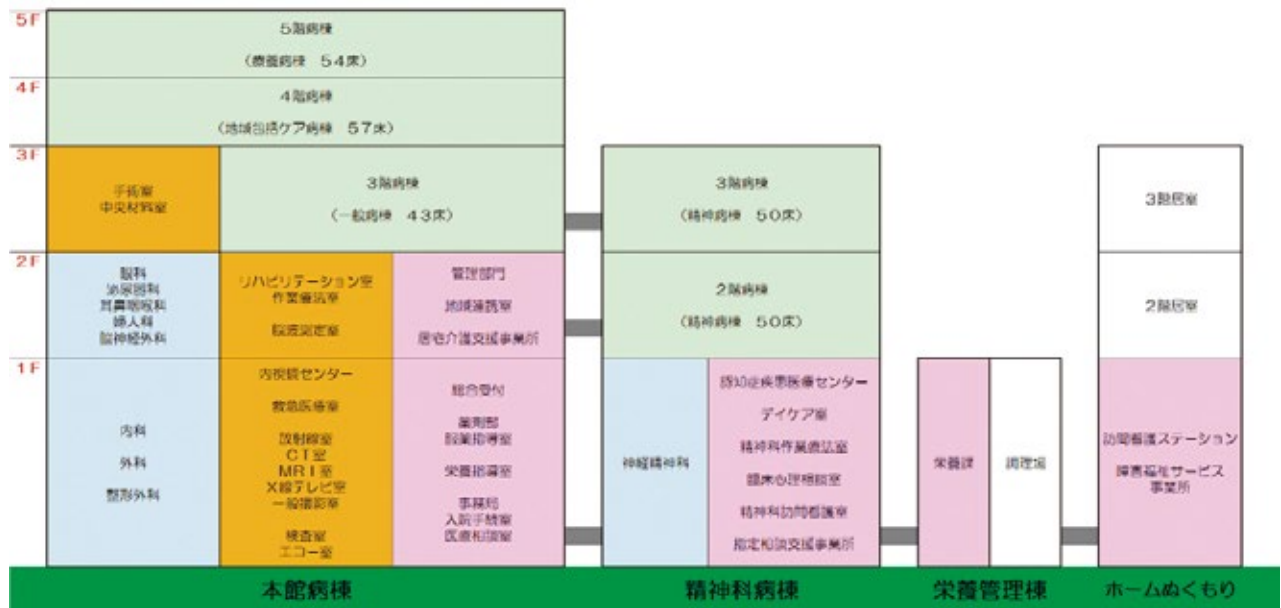


図2 院内図（国保野上厚生総合病院HPより）

ズな連携を構築していること、精神科病棟を備えていること、別館にコロナ患者のための病室を設けていることである。地域住民の医療、福祉、健康を充実させる中核病院として機能していることがわかった。

2. 実習内容

実習内容について、表1にまとめた。

表1 実習内容

時間割	内容	詳細
1日目午前	病棟見学	患者の様子の確認と経腸栄養チューブの様子を見学させていただいた。
	回診	胃カメラ撮影の見学させていただいた。
	午後	病棟見学 カンファ
2日目午前	病棟見学	聴診の体験、患者の病態の確認。
	病棟案内	病棟の各施設を紹介させていただいた。
	午後	外来見学

3. 考察

今回の実習は、臨床系科目を学んで初めて臨んだ実習であるため、1・2年生の頃とはまた異なった視点をもてたと思う。患者がどういう病態にあるのかを考え、この患者にはどういう治療選択肢があるのか、そして内科医がどのように仕事に取り組んでいるのかについてより明確になっていた感じがした。例えば、栄養について経口がだめなら胃管、経腸、中心静脈栄養と

切り替えていくということを知識として知っていても、実際には食事をしていない人は嘔吐反射が激しく切り替えが難しかったり、認知症を合併していて家族とのやり取りが必要だとか、単純な話ではないと思った。この実習での反省点として、地域医療連携室について深く学べなかったなので、どのような働きをしているのか調べたいと思う。

4. 謝 辞

2日間という短い期間でしたが、お世話になった担当医の鴻谷先生をはじめ、国保野上厚生総合病院の皆様、このような機会を設けていただきました和歌山県立医科大学地域医療支援センターの方々には深くお礼申し上げます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生

井上 弘康

1. 実習施設とその地域の概要

国保野上厚生総合病院は和歌山県の紀美野町に位置しており、JR海南駅から東にバスで20分ほどの場所にある。したがって、和歌山県内の公的医療機関の中では比較的和歌山市に近い場所に位置している部類で、へき地医療拠点病院の中では最も近い。北は紀の川市、南には「ながみね」山脈が東西に走り有田郡に、東は伊都郡・高野山、西は海南市に囲まれている。気候は温暖で冬でも降雪はほとんどなく、緑豊かな地域である。

診療科は内科、外科、整形外科、眼科、泌尿器科、神経精神科、耳鼻咽喉科、脳神経外科、婦人科の9つあり、病床は一般病床100床（うち地域包括ケア病床57床）、療養病床54床、精神病床100床の計254床からなる。建物は本館病棟、精神科病棟、栄養管理棟、ホームぬくもり（障害者福祉サービス事業所）の4つある。

医療圏としては和歌山市・海南市の2つの市と紀美野町からなる和歌山医療圏に属し、3市町で人口は約40万人として和歌山県の中では最大の人口の医療圏である。紀美野町の人口は9206人でそのうち65歳以上の人口は4065人で高齢化率は44.2%となっており、県平均の30.9%よりも高い。（2015年10月1日時点）

2. 実習内容

1日目の午前中は外来を見学させていただいた。和歌山県立医科大学地域医療枠の卒業生であり、医師5年目の濱裕也先生につかせていただいていたので、濱先生が外来をする様子を見学させていただいた。内科の外来の様子を見学させていただいた。

内科外来はほとんどが高齢者といった具合で、具体的な年齢まではわからないが60～70代

の方が多かったように思う。高血圧や糖尿病のような日常的な疾患が大部分を占めており、定期的に通われており薬を服用しているが数値はどうなっているかというような患者さんが多かった印象である。

外来の様子で強く印象に残っていることが2点ある。1つは担当してくださった先生でもわからない疾患については、積極的に先輩の医師に電話をかけたり、周囲の看護師や薬剤師といった医療従事者に質問して聞いていたことだ。また、少し異なるかもしれないが薬を処方する際には時折、「薬について確認させていただきます」とことわって、スマートフォンで薬の添付文書のようなものを見ていたのも心に残っている。もう1つは、患者さんには優しいだけでなくこちらの言うことを聞かせるのも大切だということだ。患者さんの多くは医師に協力的で、体調に変化はないかなどを話し、レントゲンや検査の数値の説明に耳を傾け医師の指導を受け、次の日程にはきちんとやってくる（だろう）という方がほとんどであるが、中には薬を飲むのを敬遠されたり、他科を受診する必要があるが後回ししようとする患者さんもいらっしまった。しかし、そういう患者さんをそのままにしまうと治療に支障が出てしまうので、そこは譲らず強く服用や受診を主張し、最終的には患者さんが渋々かもしれないが納得して医師の言うことに従うという光景が何回かあった。医師の強さ的な側面を見た気がした。

1日目の午後は正常に嚥下するのが難しい患者さんに対して、嚥下造影検査を行うのを観察させていただいた。嚥下造影検査とはX線による透視下で実際の嚥下動作を確認する検査で、造影剤（バリウムでした）を混ぜた飲み物、とろみをつけた飲み物やゼリー、または食事の一部などを、実際に飲み込み、その様子をリアルタイムで映し出されるモニターで確認する。口腔内から咽頭にかけての、実際の食物の飲み込みの様子を観察できるため、嚥下中に食塊が通過する様子や、喉頭、咽頭に残っていないか、誤嚥していないかなどを確認することができる。この結果によって今後の食事形態や食事時の姿勢の調節、嚥下訓練の必要性や方針などを決定することだ。検査は医師の他に看護師、栄養士、言語聴覚士など様々な医療従事者が一緒に行っており、全員で一生懸命検査に取り組まれていた。各食物を飲み込んでいき、嚥下がいまひとつ上手いかなかったものはもう一度飲み込んでもらったり、体勢を変えたりして飲み込んでもらったりして検査を行っていた。

2日目については病院見学をして終了した。病院は1の実習施設とその地域の概要で記したとおりで、内科で内視鏡検査を見させていただいたり、CT室でCTを見せてもらったりした。野上厚生総合病院は本館病棟の他に精神科病棟が存在し、100床の精神病床があるとのことだった。

3. 考 察

2の項の印象に残っていることでも書いたが、外来で、自分では少しわからない疾患があったら、先輩医師に電話をかけたりしてアドバイスをもらったりしている光景が何度かあった。しかし、そうやって誰かを頼りにした後でも、そういったところはおくびにも出さず、患者さ

んの前では頼れる医者という表の顔を貫き通していた。そういう切り替えも医師として働く上では大事なのかなと思った。

4. 謝 辞

コロナ禍で大変難しい中今回の夏季病院実習を計画してくださった地域医療支援センターの先生方、医学生のためならと実習を引き受けてくれた野上厚生総合病院の皆様、そして2日間いろいろと見せてくださったり教えてくださったりと本当にお世話になりました濱裕也先生には、心より感謝申し上げます。今後自分が医師として成長していく中で、非常に良い体験をさせていただきました。ありがとうございました。

4 有田市立病院



■ 位置 >> 和歌山県有田市宮崎町6

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生

野久保 翔太

8月2日と8月3日に有田市立病院で実習した。

有田市立病院は、町村合併や市制施行に伴い増大する地域医療の幅広い医療需要に応えるため、施設や設備の充実と診療機能の向上を図りつつ地域住民の健康の保持と増進に大きな役割を果たしている。

有田市は和歌山県の中部に位置し、北部は山脈が連なり港町付近で平野となる。南部も山々が連なるが北部よりも標高が低く、東に行くにつれて再び標高が高まる。人口は年々減少しており令和3年9月時点で26887人である。

1日目の午前中は整形外科外来を見学した。10代から40代の患者もいたが、主な年齢層は

やはり高齢者が圧倒的に多かったため、肩関節周囲炎や脊柱管狭窄症、頰椎症性脊髄症といった加齢に伴ってよく見られる症例が多く見られた。10代から40代では、部活動中の野球肘や足の突っ張り、通勤中の怪我などが見られた。視診、触診、エコーといった検査からCTやMRIに移行していく流れが勉強になり、現場の雰囲気や現実を感じることができた。整形外科とは一見関係の薄そうな症例にも正確に対応している場面も多く見ることができた。分け隔てない知識を持つことは地域医療に携わるうえでも特に必要なスキルだと思うので、このような場面が来てもしっかり判断できるように普段の学習を大切にしようと思った。

午後には鎖骨骨折の手術を見学した。今回はプレート固定の手術であったが、プレートのメリットとして、直接的に骨折部を整復するため良好なアライメントが得られる、強固な固定性が得られるため早期の可動域訓練開始や早期の社会復帰が可能となる、疼痛が早期に軽減できる、保存療法や他の固定法に比べ外固定期間を短縮できるといったものがある。この鎖骨骨幹部骨折ではRobinson分類が用いられる。鎖骨を近位部、骨幹部、遠位部に分け、各々に対し転位の少ないものをA、転位の大きいものをBとしている。さらに骨幹部骨折type2Aは転位のほとんど無いA1と角状変形のA2に分類し、type2Bは単純骨折または小骨片を有するB1と大きな第3骨片を有するものや粉碎骨折であるB2に分類している。鎖骨骨幹部骨折では転位の大きい骨折では三角筋や僧帽筋が介在し偽関節となることがあるため、Robinson分類type2が手術適応となる。スクリューを挿入する際に全ての骨を固定しつつ周囲の組織を傷つけないようにすることができるかが今回の重要なポイントの1つであり、この可否によっては追加の処置も必要であったが全て順調に進み手術は終了した。自分にとって今回が初めての整形外科の手術見学であったが、先生方が詳しく病態や手技の説明をしてくださったことで非常に興味深く見学することができた。

2日目は病院内の案内と院長先生の内視鏡の様子を見学させていただくことができた。これも自分にとっては初めてのことであり、ここでも詳細に教えていただいたためとても勉強になった。また、腹部エコーを見学している際にも普段一対一でないとなかなか聞けないようなお話も聞くことができた。地域枠の先生方2人にお話を伺う機会も得ることができ、将来のことや今現在自分のできることについて考える際の新たな視点も得ることができた。新たな知識や経験に加え、自分の思考回路や物事を見る目線を進化させることができ、非常に貴重な体験をすることができた。

最後になりましたが、充実した実習を企画してくださった先生方、指導していただいた有田市立病院の先生方、協力していただいた患者様に心から感謝いたします。

1. 実習施設とその地域の概要

有田市は、和歌山県中部に位置する市である。有田みかん発祥の地、蚊取り線香発祥の地である。熊野古道が市東部を南北に通っている。旧有田郡。

平成27年国勢調査より前回調査からの人口増減をみると、6.98%減の28,470人であり、増減率は県内30市町村中18位。人口密度は773.01人/km²であり、県内30市町村中3位。令和2年調査において総人口27,736人、高齢人口比率33.8%、75歳以上17.6%、65歳以上の人口9,374人（男3,959人、女5,415人）。一人暮らし、同居での在宅はそれぞれ2,450人、6,500人、施設入居者424人。

有田市立病院は、和歌山県有田市にある医療機関で、有田市立病院事業の設置等に関する条例により設置された市立の病院である。地域唯一の公立病院として、周産期医療（分娩・小児）を担い、救急受入れも積極的に行っている。入院機能として3病棟153床を構え、そのうち地域包括ケア病棟を2病棟編成し、地域患者の受入れを行っている。（≡地域包括ケアシステム）

2. 実習内容

はじめに外来を見学させていただいた。特に印象的だったのは、患者に対する医師の向き合い方だった。例えば、画像検査を何度も受けており、少し期間を空けて再度検査が必要と言われてきたが、それに対して疑問を持っている患者に、実際受けてきた検査でどんな事がわかって、繰り返すことにどんな意味があるのかを簡潔にわかりやすく説明されていた。自覚症状がない患者にも何が体に起こっているかを図解したり、これから危惧されることなどを丁寧に説明、知ってもらい、受ける検査や内服薬、改善すべき生活習慣に納得してもらうことを大切にされているのだと感じた。

他のところで得た知識を代替案として相談してきた患者にも、本人にとって何故その手段を選んだほうがいいのかを説明された時、患者の不安そうであったり少し不服そうであったりした表情が、和らいだり、頷かれているのを見て、治療を続けてもらう本人に受け入れてもらうことの重要さを感じた。加えて付き添いの方にも良く理解してもらえるように繰り返しの説明を行っていた。

他にも、とある薬剤でアレルギー副反応が出たが新型コロナウイルスのワクチン接種が受けられるかの相談など、多様な理由で外来受診される方がいることを実感した。

また診断が現段階ではっきりせず精査の方向性を決めることが難しい場合、隣の外来の上司の方に相談して、空き時間にすぐ時間をとって相談が可能であったりしたところが、自分としても将来安心できると感じた。

胃カメラ、内視鏡に触らせていただけたのも興味深かった。

3. 考 察

地域医療は総合的な医療が身に付きやすく、例えば患者の直の訴えや、症状、様子の若干の変化などに気づき、適切な行動を取るといった力が磨かれると感じた。高齢の方も多く、正確な情報が問診のみで得られるとは限らないということも考慮しなければならないと思った。また治療に関しても、検査で発見、診断されたりした時点で侵襲性の高い治療介入を行うよりも経過観察、対症療法を大きく視野に入れたり、また胃瘻や人工呼吸器などをどこまで造設、活用するかというのも問題点となって来る。患者本人だけでなく家族の声や生活状況なども踏まえての、終末期に寄り添った医療に触れていけるような場であると思った。

4. 謝 辞

急なお願いにも快く対応していただき、病院の見学や患者さんとの現場だけでなく、地域医療に関わる医師として、また女医としての貴重な御意見をお聞きする事ができ楽しかったです。深海三恵先生、有田市立病院の方々、貴重なお時間を割いていただき有難うございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科3年生

和田 愛梨

1. 実習施設とその地域の概要

今回実習させていただいた有田市立病院は、昭和25年10月に、有田市の前身である箕島町の国民健康保険直営病院として開設された病院であり。有田医療圏内に位置する。その後の昭和29年の町村合併や昭和31年の市制施行によって増大した地域医療の幅広い医療需要に対応しながら、地域住民の健康の保持と増進に大きな役割を果たしている。有田医療圏は有田市・湯浅町・広川町・有田川町からなり、面積は474.85km²、総人口74,255人の過疎地域型二次医療圏である。この医療圏内には有田市立病院を含め5つの病院が存在し、地域医療を担っているものの、和歌山市に比較的近いと、和歌山医療圏に強く依存しており患者の流出率が他の医療圏と比較して高くなっているのが特徴である。また、総人口の減少と高齢者人口の増加が予測されているため、他の医療圏同様に少子高齢化が問題となっている。

2. 実習内容

1日目にはまず、担当の先生に各医局について説明を受けながら病院内を案内していただいた。その後、先生の受け持つ患者さんについて画像や検査結果を見せてもらいながら説明を受けたほか、リハビリ科を見学させてもらった。午後には入院患者の病棟を見学した後、血圧の測り方や聴診器の扱い方といった診察における基本的な手技の練習を行い、実際に病棟に入院

している患者さんの心音を聞かせていただいた。その他には、患者さんの胃カメラ検査を見学するなどした。2日目には、まず担当の先生の外来診察を見学させていただき、その後患者さんのデータを用いてCOPDの病態について説明を受けた。また、健康診断に来られた方の胃カメラ・大腸カメラ検査を見学しながら検査の手順や注意すべき点について学んだりした。

3. 考 察

今回の病院実習を通して、医師が患者さんのどのような点に着目して診察・検査を行い最終的に診断するまでの実践的な過程を実際の医療の現場で知ることができた。単に知識があるだけでは病気を特定することができず、検査や診察で得られた情報をもとに様々な可能性を考えながら診断していく難しさを思い知らされた。また、今回の実習では地域医療卒出身の先生に卒後の具体的な流れなどについての貴重なお話を聞くことができ、自分の今後の進路について考えるととても良い経験になったと思う。

4. 謝 辞

最後になりましたが、お忙しい中時間を作ってまだ臨床的知識のほとんどない私にわかりやすく様々な病態について説明して下さった永井早紀先生をはじめ、コロナ禍で大変な状況の中今回の実習を受け入れて下さった有田市立病院の皆様にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

5 ひだか病院



■ 位置 >> 和歌山県御坊市藪116-2

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生

高橋 翠

1. 実習施設とその地域の概要

ひだか病院は御坊市、紀州鉄道紀伊御坊駅の北側に位置する。御坊市は北は日高町や美浜町、東は日高川町、南は印南町、西は太平洋に面する紀中日高地域の中核都市である。面積は43.91km²であり、平坦な地形が多く、日高川の河口を中心に住宅地や田畑が広がっている。黒潮の影響で気候は温暖で、花卉栽培を中心とした農業が盛んである。人口は約2万2千人である。ひだか病院はこの地域のへき地医療拠点病院に指定されている。診療科は消化器内科、糖尿病・内分泌内科、循環器内科、小児科、産婦人科、外科、耳鼻咽喉科、皮膚科、泌尿器科、眼科、精神科、整形外科、脳神経外科、放射線科、麻酔科、歯科口腔外科、形成外科、リハビ

リテーション科、救急科がある。一部の科では常勤の医師がおらず、大学病院等から医師を派遣して診療を行っている。病床はHCU8床、一般病棟173床、地域包括ケア病棟52床、回復期リハビリテーション病棟30床、精神病床100床、感染症病床4床の計367床である。

2. 実習内容

今回の実習では循環器内科の今村沙梨先生にご教授いただいた。

1日目はまず循環器内科が関わる院内の施設を見学させていただいた。この日、今村先生が救急担当となっていたため、次に他病院からの紹介の救急患者さんの診察及び治療を見学させていただいた。この患者さんは前日に紹介元病院に入院されており、入院中に脈拍が20秒ほど飛ぶことがあったため、一時ペースメーカーカテーテル挿入目的でひだか病院へ救急搬送となった。今村先生は患者さんの状態や紹介状を確認し、ご家族への治療方針の説明が行われた。その間に他医と看護師が採血等を行い、血管造影室へ患者さんを搬入した。血管造影室へも同行し、今村先生が一時ペースメーカーカテーテル留置術を行われているところを見学させていただいた。一時ペースメーカーカテーテル留置術について循環器内科の寺口郁子先生にご説明いただいた。留置完了後、患者さんはHCUに入院された。HCUも見学させていただき、先ほどの患者さんの病状等についてご説明いただいた。また、患者さんにエコーを当てながら、心エコーの描出方法についてご説明いただいた。午後からは、1ヶ月程前にペースメーカー植込み術を受けられた患者さんが、横隔膜刺激症状があるとして今村先生の外来に来院されたところに同席させていただいた。ペースメーカーの出力の調整等は試しており、それでも改善しないとのことだったため、電極の位置を変える必要があるということを説明された。癒着が進む前に再植込みを行う方がいいため、患者さんと相談の上、翌日再植込み術を行うこととなった。続いて、エコー室にて心嚢液の貯留が認められる患者さんの心エコー検査を見学させていただいた。

2日目の午前中は、前日に来院された患者さんのペースメーカー再植込み術を見学させていただいた。体位等によって横隔膜刺激症状があるときとないときがあるため、意識下で電極の位置を変え、横隔膜刺激症状があるかをその都度患者さんに確認する形で治療が進められた。午後からは、今村先生が循環器内科を選ばれた理由や大学病院と外病院での働き方の違い、専門医について等お話を伺った。最後に前日に心嚢液貯留がみられた患者さんの心嚢穿刺及び心嚢ドレーン留置術を見学させていただいた。

3. 考 察

一時ペースメーカーカテーテル留置術を初めから見学させていただいたのは今回が初めてで、貴重な経験ができた。また、一時ペースメーカーカテーテル留置術で使用する器具等も詳しく教えていただき、勉強になった。ペースメーカー植込み術を見学するのも今回が初めてで、電極を心筋にスクリューで固定する手技等、繊細な手技が多く、治療のおもしろさを感じた。このよう

な清潔手技を必要とする高度で繊細な手技が中核病院で行えるということを知り、地方で提供できる医療がさらに進歩していくと感じた。一方で、大学病院に比べると医師数がかなり少ないため、治療を行うに当たって様々な工夫がされていることも中核病院ならではのと感じた。

今回女性の先生方から、大学病院以外での女性医師の働き方や、診療科を決める際の考え方などを伺うことができ、将来を考える上で非常に勉強になった。大学病院以外で働く女性医師の働き方について伺う機会はあまり多くないため、今回の実習で様々なお話を伺うことができた点もよかった。

ひだか病院はへき地医療拠点病院であり、診療科も多く、実施できる手技もへき地診療所と比べてはるかに多かった。3年時の地域医療枠実習で行かせていただいたへき地診療所と、今回行かせていただいたへき地医療拠点病院の両方で実習させていただいたことで、それぞれの病院が地域の医療提供において果たす役割を学ぶことができた。高齢化が進む和歌山県において地域の医療体制を充実させるためには、かかりつけとなる診療所等の病院は不可欠であるが、多くの高度な治療が行える拠点病院も地域ごとに必要であると感じた。和歌山県は南北に長く、県南部から北部の医大病院に通うのは負担が大きい。しかし、診療所だけでは入院できる施設も治療の選択肢も限られる。このため、高度な医療を提供できる拠点病院が県内各所に配置されている今の医療提供状況を維持していく必要があると感じた。

4. 謝 辞

本実習では、今村沙梨先生をはじめ、ひだか病院循環器内科の先生方に温かいご指導を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

今回、大学病院での実習だけでは経験できないことを多々学ぶことができ、今後の大きな糧になると感じております。本実習で学んだことや感じたことを忘れることなく、地域医療に携わる者として、今後も勉学に励んでまいりたいと存じます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生

井上 涼介

1. 実習施設とその地域の概要

ひだか病院は昭和24年に御坊町外11ヶ村国保組合が母体となり、国保日高病院として設立された。以来、御坊保健医療圏（御坊市、美浜町、日高町、由良町、日高川町、印南町）において地域中核病院として医療を担っている。病床数は一般病床263床、精神病床100床、感染症病床4床の合計367床であり、県内の地域中核病院にはない精神科病棟（100床）がある。これによって県内の地域中核病院で唯一五疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神

疾患)、五事業(周産期医療、救急医療、小児医療、災害時における医療、へき地医療)への対応が病院単体で可能となっている。

また、高齢化による社会構造の変化に対応するため病棟の改革を進め、高度急性期や急性期に対応するHCU(8床)と一般病床(173床)の他に、回復期に対応する地域包括ケア病棟(52床)、回復期リハビリテーション病棟(30床)ができ、高度急性期から急性期、回復期にかけて切れ目のない医療を提供できるようになっている。

ひだか病院が位置している御坊医療圏は面積579km²であり、2015年において人口63063人、人口増減率-5.41%、高齢化率31.6%と全国と比較して、人口の減少と高齢化が進行している地域である。

2. 実習内容

1日目は主に第二内科の谷河先生のもとで外来診療の見学をさせていただいた。診察中の患者への対応はもちろん、どのような疾患であるかの考え方など多くのことを学ぶことができた。また、午後には骨髄穿刺の見学をさせていただいた。谷河先生の専門は血液内科であり、行う機会は少ないものの実技を行うこともあるとわかった。外来診療が終了後、病棟業務の見学をさせていただいた。この際に病棟の案内もさせていただいた。

2日目は午前中に外来診療を見学させていただいた。その後、リンパ節生検の検体処理の見学をさせていただいた。大学病院と異なり、病理部がないため外注するための処理を自分で行う必要があることがわかった。午後からは救急対応の見学をさせていただいた。その日は患者が来なかったが、谷河先生から過去の経験や対応の仕方を教えていただいた。

3. 考 察

外来診療については谷河先生の話では、大学病院と比べて重症度の低いコモンな疾患の患者が多く、終末期の患者も多いことから、幅広い疾患に対する知識はもちろん、患者やその家族の状況を考慮した治療が重要であると感じた。また重度の疾患を持つ患者も来ることがあるため、専門的な知識も必要であると理解した。しかし、どうしても分からないことに会うことは必ずあると思うので、縦や横のつながりを作っておき相談できる環境を作っておくことが大事と思った。

また実習を通して感じたのが、人数が少ないため個人で考えて対応しなければならない場面が比較的多いことである。そのため、在学中、研修期間中に少しでも多くの知識や手技を身につける必要性を感じた。

4. 謝 辞

最後になりましたが、この度お忙しい中実習を受け入れてくださった谷河先生、ひだか病院

のスタッフの皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。研修を通して、地域医療を支える医師に必要なことを理解できたので、今後の学業に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療専攻3年生

西村 加奈

2021年7月28、29日の2日間、和歌山県御坊市にあるひだか病院の産婦人科を見学で実習させていただきました。医師3年目の西村美咲先生が担当してくださり、多くのことを学ばせていただくことができました。西村先生以外にも、産婦人科の西森先生、山本先生、西岡先生にも大変お世話になった。

1. 実習施設とその地域の概要

設立されて今年で70年目のひだか病院は、和歌山県御坊保健医療圏を支える中核病院である。367床を有しており、地域の総合病院として、急性期医療、周産期医療、精神科医療、および災害医療等を担っている。また、和歌山県がん診療連携推進病院、第2種感染症指定医療機関、災害拠点病院としての役割も果たしている。御坊市に近接している美浜町、日高町、由良町、日高川町、印南町から訪れる人が多いようだ。

2. 実習内容

[1日目]

出勤後、病棟の案内をしてもらった。その後午前中は、妊婦さんの診察と、外来での診察の様子を見学させていただいた。病棟に訪れていた妊婦さんには陣痛促進剤を打つ前の同意書の説明を丁寧に、わかりやすい言葉を使って行って、その様子を見学させていただいた。外来では、子宮がん検診に来ている方が多く、年齢層は様々であった。がん検診がどのように行われているのかを見ることができた。

昼食をとって13:00から、子宮肉腫に対して両側付属器摘出術、および腹腔内腫瘍摘出術のオペを見学してもらった。事前にとっていたMRI画像よりもはるかに大きな肉腫が見つかり、予定よりも長時間のオペとなっていた。腫瘍が腸に絡まりついていたので、外科の先生も合流して手術が進められていた。オペ中、西村先生が今どういった状況なのかを随時解説してくださったので、理解しながら見ることができた。閉腹する少し前ぐらいにお産の呼び出しがあり、西岡先生について行ってお産の場に立ちあわせていただいた。比較的スムーズなお産だったので、無事に胎児が生まれる瞬間を見届けることができた。

[2日目]

まず、5日前くらいにお産をした方の診察の見学をさせていただいた。膣壁裂傷や頸管裂傷が生じていた部分を抜糸する様子を見させてもらった。その後、昼から見学させてもらうオペがどういったものなのかの説明を受けた。西村先生が本当に丁寧にわかりやすく説明してくださったので、オペでどういったところに注目したらよいのか、どういったところがポイントになってくるのかを理解することができた。

昼食をとって、13:00から2件の手術を見学させてもらった。1件目は子宮頸管ポリープに対してポリープ切除術であった。外来では切除することができない程奥にできたポリープであったため、手術室でポリープを切除することになったそうだ。西岡先生がスムーズに切除していたので30分程で無事終了した。2件目は子宮内膜増殖症に対して子宮付属器摘出術であった。この患者さんは子宮内膜が異型に増殖していたことと、今後出産を希望していなかったことから、子宮と卵巣を摘出することになったそうだ。西森先生が執刀しており、とても手際が良くスムーズにオペが進められていた。事前に予習して知識をつけた状態で見学させていただいたことと、オペ中に西岡先生が解説してくださったことにより、しっかりと理解しながら見ることができた。ガーゼカウントが合わないという事態が起こっていたが、無事にガーゼが見つかり、手術を終えることができた。

3. 考 察

手術を見学させてもらって最も感じたことは、医師がチームのリーダーになって判断を下し、指示を出しているということだ。もちろん看護師さんやその他の医療スタッフが丸となって行っているのに違いはないが、最終的な判断はすべて医師に委ねられていた。わかってはいたが、実際の手術現場を見て改めて医師の判断の重要性和責任の重さを感じた。その場の状況を見て最善の判断ができるようにしっかりと知識をつけ、経験を積んでおかなければならないのだとひしひしと感じた。

また、外来や病棟での診察の様子を見学して、医師の言葉1つ1つの重みを感じた。同じ1つのことを伝えるのでも、どういったニュアンスで伝えるかで、患者さんの受け取り方や感じ方、安心感が異なってくると思う。相手にしっかりと理解してもらうとともに不安にさせないような言い方も、現場に出て先輩医師から学ばないといけないなと感じた。

4. 謝 辞

お忙しいところ、つきっきりでたくさんのことを教えていただき、本当にありがとうございました。この2日間で多くのことを学び、感じることができました。その中でも最も印象に残っているのは、お産に立ち会った瞬間のことです。たくさん奇跡が重なって新しい命が誕生するのだと感じたとともに、医師や看護師さんの言葉1つ1つが患者さんにとって重たいものな

のだと思いました。また、3つの手術にも立ちあわせていただき、医師の判断がいかに重要なのか思い知りました。チーム全員で1人の患者さんの病気を治している姿がかっこよく、自分も早くその一員になりたいと思いました。患者さんの不安を取り除けるような声掛け、その場に応じた最善の判断ができるようになりたいです。そのためにしっかりと勉強に励み、多くのことを積極的に学び、成長していきたいと思います。

産婦人科でお世話になった先生方は本当に尊敬できる方ばかりで、私も先生方のようになれるよう、日々精進していきたいと強く思いました。本当にありがとうございました。

6 紀南病院



■ 位置 >> 和歌山県田辺市新庄町46番地の70

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生

田中 日向子

1. 実習施設とその地域の概要

紀南病院は、終戦直後に地域住民のための病院として開設され、現在は田辺市、白浜町、上富田町、みなべ町で構成された一部事務組合が運営している。地域住民のための病院として、救急医療、災害医療及び周産期医療などの機能をもち、現在は、23診療科356床（感染病床4床）の体制で診療を行っている。また、地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター、第二種感染症指定医療機関、救急告示病院、和歌山県災害拠点病院、へき地医療拠点病院、洋上救急協力医療機関に指定されている。病棟は、急性期病床を担う7病棟に加え、在宅復帰を目指す患者を支援する回復期のための地域包括ケア病棟が1病棟ある。

田辺二次医療圏は、和歌山県の医療圏の中で最も広い医療圏で、面積は1579.98km²である。紀南病院がある田辺市の他、みなべ町、白浜町、上富田町、すさみ町から構成されている。人口は、128,161人であり、高齢化率は31.90%で全国平均の26.60%をおおきく上回っており、県平均が30.90%であるので、県平均よりも高齢化率が高くなっている（総務省平成27年国勢調査より）。

2. 実習内容

● 実習の時間割

8月5日(木)

午前 病院見学

内視鏡検査見学

病棟見学

午後 外来見学

病院説明会参加

8月6日(金)

午前 内科 外来見学

実習の内容

1日目は、病院内を案内していただいた後、内視鏡検査室で経鼻的内視鏡を使った胃瘻装置の取り替えを見学させていただいた。内科医2人と看護師3人で主に行っており、付き添っていただいた地域医療卒8年目の竹中先生に教わりながら、検査室で見学させていただいた。その後、経口的な内視鏡検査も見学し、経鼻内視鏡と経口内視鏡の手技の違いを教えていただいた。また他の検査室で潰瘍性大腸炎の患者さんの大腸検査や大腸の健康診断の様子を見学した。病棟見学では、糖尿病で入院している患者さんの問診を見学した。

午後からは、内科の外来診察を見学した。結核性胸膜炎の治療薬により食欲不振になっている患者さんの薬の調節や、糖尿病の患者さんへの処方などを見させていただいた。その後、紀南病院の研修説明会に参加し、小児科、循環器内科、内科の研修の説明を聞いた。

2日目は、地域医療卒3年目の大橋先生のもとで、外来患者さんの初診を見学した。患者さんやご家族から色々お話を聞いて、必要な検査を判断していらっしゃった。その後、大橋先生や内科の吉松先生、紀南病院に見学に来ていた他大学の6年生の方々とお話をさせていただいた。地域医療のお話や大学生活のお話などたくさんのお話を聞かせていただいた。

3. 考 察

初めて内視鏡検査を実際に見せていただいて、カメラの操作が難しく、検査しなければならない場所や順番が決まっていることを知った。竹中先生は糖尿病・内分泌・代謝内科を専門と

していたが、胃瘻交換や大腸検査など消化器系の処置もなさっていた。大学病院では専門が分かれているので、専門外の手技を学ぶのは大変そうだなと思った。また、外来では、結核性胸膜炎の患者さんを担当なさっており、地域医療において、内科医はほとんど全ての臓器を見なければいけないのかと驚いた。糖尿病患者さんや結核性胸膜炎の患者さんの外来の前に、薬について教えていただいたのだが、結核の治療について、私は1種類の治療法しか覚えていなかった。しかし、今回のように副作用が強くなってしまった患者さんに対して薬を調節する為に、治療法は複数覚えておかなければならないと学んだ。1日目の実習では、幅広い知識と内視鏡、エコーなどの検査手技の重要性を実感した。

2日目の初診外来の見学では、外来の難しさを実感できた。患者さんによって痛みの感じ方や表現の仕方が全く異なっており、教科書の文言どおりには言っていられないことを痛感した。大橋先生が患者さんの病気に対する不安を聞いているのを見て、診療は病気を見つけるだけではないのだなと思った。2日目では、コミュニケーションの大切さを実感した。

地域医療の先生方の話をきいて、在学中や研修中に何を身につけたらいいのかが明確になった。また、紀南病院には指導医の先生がいらっしゃるが、いらっしゃらない病院もあると聞いて、ますます勉強しなければいけないなと感じた。

4. 謝 辞

最後になりましたが、コロナウイルスの流行で大変お忙しい中、私たちを受け入れてくださった、竹中先生、大橋先生、内科の先生方をはじめとする紀南病院の皆様や見学させていただいた地域の皆様、研修を企画してくださった地域医療支援センターの皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。1年生の時の病院実習以来、実際の臨床現場を見させていただく機会がなかったので、この2日間はとても貴重な経験となりました。竹中先生と大橋先生にたくさんお話を聞かせていただいて、将来についてよく考えることができました。今回の実習で見学させていただいた現場を意識して、今後もより一層精進していきたいと思えます。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科4年生

行岡 翼

1. 実習施設とその地域の概要

紀南病院は、和歌山県田辺市新庄町にある病院で、終戦直後に地域住民のための病院として開設された。地域中核病院として、23診療科356床（感染病床4床）の体制で診療を行い、病棟は急性期病床を担う7病棟に加え、在宅復帰を目指す患者を支援する回復期のための地域包

括ケア病棟が1病棟設置されている。健康診断から心疾患治療、がん診療、周産期医療、小児医療、救急医療など紀南の幅広いニーズに対応できるよう充実した医療スタッフと病院機能を持っている。

田辺二次医療圏は、紀南病院がある田辺市だけでなく、みなべ町、白浜町、上富田町、すさみ町から構成され、面積は1579.98km²を占めている。これは和歌山県の医療圏の中で最も広い。2015年の国勢調査による人口は、128,161人であり、高齢化率は31.90%と全国平均の26.60%を上回っている。

2. 実習内容

実習日程

- 8月5日(木)

午前 病院見学

内科 内視鏡検査見学

午後 内科 外来見学

病院説明会参加

- 8月6日(金)

午前 内科 外来見学

実習の内容

今回の実習は、地域医療卒の、8年目の内科の竹中先生と3年目の内科の大橋先生の手で、実際の臨床現場を見学させていただいた。1日目の午前は、内視鏡検査室での見学だった。高齢の方で栄養が取りにくい患者さんの胃瘻装置の取り替えのための経鼻的内視鏡検査や、健康診断のための経口的な内視鏡検査、大腸内の様子を見るための、下部消化管内視鏡検査など様々な目的、用途で用いられる内視鏡の手技を見学させていただいた。午後からは、内科の外来患者さんの診察を見学した。結核性胸膜炎の患者さんに対する薬の調節や、糖尿病の患者さんの血糖コントロールなどの診察現場を見学させていただいた。

2日目は、初診の外来患者さんの診察を見学させていただいた。1日目とは異なり、初めて診察する患者さんの症状を細かく聞き取りながら、最近の出来事、家族状況、今の気持ちなどを引出させるコミュニケーションを見学させていただいた。

3. 考 察

紀南病院がある田辺二次医療圏は全国平均よりも高齢化率が高かったように患者さんの年齢層も高かった。また紀南病院では健康診断も受け入れられており、がんや心疾患治療、小児医療、入院から救急疾患まで幅広い年齢の方を診察する機会があるということを知った。また、

先生も糖尿病を専攻しているからといって、糖尿病の患者さんだけを診るのではなく、呼吸器疾患や消化器疾患など幅広い分野を診察する必要があるということを実際の現場を見て、改めて学び、感じた。さらに、胸腔鏡検査では異常はないが、既往歴や画像所見から結核性胸膜炎と診断された患者さんに対する多剤併用療法の途中経過を評価し、薬や副作用を調節するといった、一問一答のような教科書に載っている臨床症状や検査結果を見るだけでなく、それらを知った上で、実際に患者さんを診て総合的に評価できる医師になる必要があると感じた。また、紀南病院の場合、エコーの検査技師の方がいるため、協力して画像検査をすることができるが、消化器内科の先生、呼吸器の先生や検査技師の方がいない病院では、胸腔鏡検査や内視鏡検査を自分でする必要が出てくる。またその設備がない病院等であったとしても、侵襲度の低いエコーや心電図などの検査を自分で実施し、評価できる必要があると学んだ。紀南病院では指導医の先生がいるが、地域医療を経験した先生によると、教えてくれる先生がいない場合には、全てを自分でしなければならない時がいつかあるため、大学病院や紀南病院などの中核病院にいる時など、教えてくださる先生がいる場合は、そういったことを見据えながら勉強し、わからないことがあれば解決する努力が必要であると感じた。

また、今回の実習で1番印象に残ったのはコミュニケーションの重要性である。初めて来る外来患者さん1人をとってみても、幅広い年齢層で、症状も異なり、患者さんの背景や、その人の考え方も異なる。一人ひとりに応じたコミュニケーションの方法で、患者さんの症状だけでなく、家族歴、最近のちょっとした出来事などを初めて対応する医師がどこまで聞き取れるかによって、患者さんの予後が左右されると感じた。また患者さんとのコミュニケーションだけでなく、検査技師や看護師の方とも情報を共有する重要性を感じた。さらに紀南病院は、大学病院などのように医局が診療科ごとに異なっているわけではなく、1つの医局に全ての先生が集まるのが印象的であった。自分の指導医の先生だけでなく、いろいろな科の先生とコミュニケーションをとることによって、自分の専門分野だけではない、総合的な診療能力を身に付ける必要があると感じた。また入院患者さんは、流行しているコロナウイルスのために面会が厳しく制限されている。患者さんはもちろんのこと、心配されているご家族のフォローまでできるような医師になりたいと感じた。

4. 謝 辞

この度はお忙しい中、私たちに実習の機会を与えてくださりありがとうございました。この2年間流行しているウイルスのために、実際の臨床現場を見させていただく機会がなく、机上での勉強が主となってしまいました。しかしこの2日間の現場での経験は、今後その地域で働く自分にとって、とても貴重な経験となりました。今後の学生生活では、勉学はもちろんのこと様々な分野に興味を持ち、励んで行こうと思いました。

ご指導をいただいた先生方、本当にありがとうございました。

1. 実習施設とその地域の概要

紀南病院；平成17年5月1日に和歌山県田辺市新庄町に移転し、紀南の中核病院としてプライマリ・ケアから高度専門的医療までを担っている。和歌山県災害拠点病院、へき地医療拠点病院、新医師臨床研修指定病院、第2種感染症指定医療機関、地域がん診療拠点病院、和歌山県地域周産期母子医療センターであり、附属看護専門学校を有している。

田辺市；海・山・川の大自然を有している紀南の中核都市で、龍神温泉や湯の峰温泉など有名な温泉資源に恵まれており、熊野古道や熊野本宮大社など歴史的文化的資源にも恵まれている。そのため、観光客として外国人の来訪が多くなっている。

2. 実習内容

1日目

施設の説明を受けた後、救急外来の見学をさせていただいた。救急科は、奥村先生1人が担当しており、緊急を要する重症患者の多くは南和歌山医療センターに搬送されるため、外来者数は日によって大きく異なると教えていただいた。1日目は外傷で訪れた患者さん2人の診察の見学をし、診察の際、何を意識するか、同時に多くの患者さんが来たときのトリアージについて、重症か軽症かの判断についてなどを主に教えていただいた。外来の患者さんがいない場合は基本的には待機であるが、その間は研修医の先生方と交流することができ、研修医がどのようなことをしているか、学生時代の話など様々なことをお話しさせていただいた。

2日目

2日目の外来患者数は1人で、熱中症で訪れた患者さんの診察の見学をした。熱中症の疑いがある患者さんを診る時は、重症度を表すI度、II度、III度のいずれに当てはまるかを考えることが大切で、その時に意識がはっきりしているかどうか、汗をかいているかどうかといったことに着目するということを教えていただいた。

3. 考 察

実習を通して、改めて医師と看護師の連携の大切さを学ぶことができた。どのような理由で外来に訪れたか、それがどのような状況で起きたかといった患者さんの情報は看護師から医師に伝えられるため、そこでの連携が診察の質に関わってくると感じた。また、患者さんの情報を聞いた段階で、どのような外傷がありどう身体に影響を与えるかある程度予測した状態で診

察にあたることも大切だと感じた。その中で、救急においては軽症か重症かの判断が何より重要で、重症の疑いがあれば精密検査をしたり、また専門医につなげたりと重症患者を軽症として誤って帰してしまうことのないように慎重にならなければいけないと思った。

実際の医療現場を見学し、また様々な医師の方々とお話できたことはこれからの学生生活を送るにあたって、モチベーションがとても上がった。この経験を忘れず、立派な医療従事者になれるよう日々勉学に励んでいきたい。

4. 謝 辞

病院実習におきまして、奥村先生をはじめ研修医の先生方にお忙しいところ温かくご指導いただき、ありがとうございました。普段の勉強では学ぶことのできない実際の病院での貴重な体験をさせていただき、患者との接し方や内科医に求められることなど多くのことを学ばせていただきました。この経験を糧に医師になるものとして、責任と自覚を持って日々精進していきたいと思います。2日間、本当にありがとうございました。

7 紀南こころの医療センター



■ 位置 >> 和歌山県田辺市たきない町25番1号

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠5年生

村田 七海

1. 実習施設とその地域の概要

1市4町（田辺市、みなべ町、白浜町、上富田町、すさみ町）により構成される田辺保健医療圏域の人口は128,161人であり、和歌山県総面積の33.4%を占める1,580km²の広さに渡る。1956年に創設された紀南こころの医療センターは、和歌山県南部地域で唯一の公立精神科病院であり、和歌山県精神科救急医療システム整備事業による精神科救急医療施設および、精神科応急入院指定病院、医療観察法指定通院医療機関として機能している。創設当時100床だった病床が、一時は312床まで増設されていたが、現在は退院促進の取り組みや少子高齢化の影響から、病棟を休床するなど現在198床となっており、入院患者数は減少傾向にある。

外来通院患者数も徐々に減少しているが、依然として県内の精神科医療施設では最も多い通院患者数である。

この地域には障害者の入所施設や通所施設が多く設置されており、紀南こころの医療センターはそれらの施設への精神科医療上の支援も行っている。本実習では就労継続支援B型の指定障害者福祉サービス事業所「陽だまり」と「ゆうあいホーム」も見学させていただいた。「陽だまり」は約20名が利用しており、精神障害者の方が少しでも早く社会復帰できるよう労働の場や生活、憩いの場を提供している。具体的な作業としては光ファイバー部品組み立てや箱折作業、シール貼り作業、ガラス選別、無農薬農園、清掃業務、チョコレート販売などを行っている。「ゆうあいホーム」は共同生活援助（介護サービス包括型）障害者ショートステイ事業として、地域生活に向けて共同生活の場を提供し、対人関係や日常生活に必要な生活技能（金銭管理・調理・洗濯・掃除）などを身につけられるよう取り組みを行っている。

2. 実習内容

8月10日(火)

13:00-15:00 外来見学

15:00-16:30 病棟見学

16:30-17:15 レポート作成

8月11日(水)

9:30-10:30 院内デイケア見学

11:00-12:00 精神障害者の通所・入所施設「陽だまり」「ゆうあいホーム」見学
〈昼食〉

13:30-15:30 訪問看護と作業療法の見学

15:30-16:00 医局で振り返り

3. 考 察

本実習中に「ゆうあいホーム」でお話を聞かせていただいた際に、職員の方から夜間救急の受け入れができる病院が近くにないことが問題だという声が上がっていた。職員さんの話によると、躁状態の方を夜間救急で診てもらうために、有田にある和歌山県立こころの医療センターまで車で行ったが、普段のかかりつけは紀南こころの医療センターなので有田にはカルテがなく、詳細が分からないため、その夜は入院せずに「翌朝、紀南こころの医療センターを受診してください」と言われて連れて帰ってきたことがあったそうだ。紀南こころの医療センターの夜間・休日救急診療は、医師不足が原因で平成26年に休止となった。それにより平成27年度から夜間・休日の救急入院患者は、有田圏域に流出しており、当該患者の受け入れができるよ

う精神科医師の確保等が課題である。本実習中に「もし紀南こころの医療センターが夜間救急を続けられていれば、夜中に有田まで車を走らせる必要もなく、我々としてはとても安心」という職員さんの切実な意見をお伺いし、医師不足を解消する必要性を強く感じた。

その他の問題点としては、長期入院患者の退院が課題である。紀南こころの医療センターの平均在院日数は平成23年度187.5日で、全国平均の301日（平成22年度）より短くなっているが、依然として、長期入院患者が多い状態が続いている（平成23年度に5年以上入院の方は約41%）。例えば、本実習の病棟見学において「治療抵抗性統合失調症の方は何十年も入院しているケースが多い」とお聞きした。和医大に転院し、電気けれん療法を受けても、症状が良くなりえず紀南こころの医療センターに帰ってきて何十年も隔離で過ごす方がいらっしゃるそうだ。精神障害者の地域移行については、厚生労働省が平成16年9月に策定した「精神保健医療福祉の改革ビジョン」に基づき、様々な施策が全国で行われているものの、年間1万人超の長期入院精神障害者が死亡により退院している現状を考えると依然として課題は多い。

また、全国的に長期入院精神障害者は減少傾向にあるが、65歳以上の長期入院精神障害者は増加傾向である。今後、田辺保健医療圏内でも認知症患者数が増加すると推計されている。そのため、南和歌山医療センターが認知症疾患医療センターとして専門医療相談や鑑別診断等を行い、関係者向けに研修を行うなど医療・介護機関と連携を行っている。紀南こころの医療センターにおいても本実習の外来見学で認知症の患者さんが一定数受診されていた。今後も認知症患者ができるだけ住み慣れた地域で生活ができるよう、医療・介護等の切れ目のない提供体制の整備が必要であると考えられる。

4. 謝 辞

最後になりましたが、実習を受け入れてくださった紀南こころの医療センターと「陽だまり」「ゆうあいホーム」の方々、大変お世話になりました。私の興味に合わせて2日間のスケジュールを組み、各所に連絡・調整してくださった糸川先生、地域医療卒のキャリアについて様々な相談に乗っていただいた山下先生、その他指導してくださった皆様、本当にありがとうございました。

8 南和歌山医療センター



■ 位置 >> 和歌山県田辺市たきない町27-1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生

三並 桃佳

1. 実習施設とその地域の概要

南和歌山医療センターは和歌山県の紀中に位置する田辺医療圏にあり、病床数316床を有する。この田辺医療圏には都会のように機能特化した病院がいくつもあるわけではないため、患者さんの状態・状況に応じた多彩な医療サービスを提供できるケアミックス病院が必要となる。南和歌山医療センターは田辺医療圏で唯一の地域医療支援病院であり、その使命を果たすため、①3次救急を担う救命救急センターや災害拠点病院としての救急医療を筆頭に、②がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、エイズ拠点病院、へき地医療拠点病院など、拠点病院としての機能を充実させ、③がん診療に伴う終末期医療のための緩和ケア病棟、④急性期の後

の回復期医療や自宅退院を支援するための包括ケア病棟、⑤在宅医療を推進するための在宅医療支援センターを有し、⑥高齢化に伴う認知症にも対応するための認知症疾患医療センターを立ち上げ、⑦地域の医療機関・消防・行政・地域住民の方々との連携を行うための地域連携室など、多岐にわたる患者さんの状態や状況に対応している。その結果、〈高度急性期・急性期・回復期・終末期・在宅〉医療など、多彩な機能を有したケアミックス病院を運営している。さらに、院外活動として、予防医療を推進するための出張健康講座や市民公開講座などを頻繁に行い、また、地域の方々と健康を語り合う看護の日やけんこうフェスタなども定期開催している。

2. 実習内容

○1日目

午前：病院の施設案内、回診見学

午後：エコー見学

午前中の病院の施設案内ではCT撮影室、MRI検査室、病棟、ICU、ヘリポートなどの施設を見学した。回診では、病棟を回り患者さんの経過を観察したり、コミュニケーションをとる様子を見学した。新型コロナウイルス感染症の患者さんのための病棟を確保するため、本来、科ごとにまとまっていた入院患者さんが別の階の病棟にいたることがあった。入院患者さんは蜂窩織炎の患者さん、術後の患者さん、胆石の患者さんなど多岐にわたっていた。また、入院患者さんの呼吸音を実際に聴く機会をいただいた。

午後のエコー見学では、腹部、頸動脈、下肢静脈瘤、心エコーなどを見学し、検査技師の方々にエコーの説明をしていただいた。

○2日目

午前：内科の外来見学

午後：内視鏡見学

午前中は内科の外来を見学した。患者さんは高齢者がほとんどで、一番若い患者さんが40代であった。健診の診察や検査結果の説明の様子を見学した。

午後は、潰瘍性大腸炎の患者さんの下部消化管内視鏡を見学した。

3. 考 察

回診見学では、患者さんの症状を治すといった医学的なことだけではなく、患者さんの家庭の状況なども深く考える必要があると感じた。病気が治ったからすぐ退院というわけではなく、家庭の環境などで社会的に入院しなければならない患者さんがいることを知った。

エコー見学では、エコーの種類にもよるが、患者さん1人あたり10分程度であり、思っていたよりも時間がかかるのだと感じた。学校の授業で、エコー検査は簡単で侵襲が少ないと習ったが、プローブの当て方や撮影などの様子を見ていると高い技術が必要だと感じたし、高齢者

や麻痺がある患者さんは、エコー検査時に体勢を保つことは簡単ではなさそうだった。また、この研修に参加するまで、エコーは全て医師がするものだと勘違いしていたため驚いた。エコー検査一つとっても、患者さんの状態を見たり、治療できるのは医師だけではできず、検査技師や看護師やその他多くのスタッフの協力があってこそなのだと実感した。

内科の外来見学では、本当に様々な患者さんがいることを学んだ。自分の専攻したい科ではない領域の患者さんに対しても診察をする必要があり、幅広い分野の知識が必要であると改めて感じた。高齢の患者さんは多くの病気を合併していることが多いため、症状の出現や薬の選択などを総合的に考えることが大切であると学んだ。また、患者さんの性格も人それぞれであったが、どのような患者さんに対しても限られた診察時間の中で症状等を聞き出したり、医師の説明を理解してもらうには高いコミュニケーション能力が必要であると感じた。先生の声の大きさや、難しい医学用語を使わずにどう説明するか、といったところがとても勉強になった。

今回の研修を通して、地域枠の先輩である先生のもとで、一対一で研修させていただいたため、自分自身が卒後3年目でどのように働いているのかがとてもイメージしやすくなった。また、研修2日目の最後に女性医師の働き方と結婚・妊娠・出産のタイミングについて考える話し合いの機会をいただいた。4人の女性の医師のお話を伺い、キャリア形成や、仕事と家庭との両立など大変参考になるアドバイスをいただいた。

4. 謝 辞

大変お忙しい中、また新型コロナウイルス感染症で大変な中、研修を受け入れてくださった今地先生をはじめ、南和歌山医療センターの皆様、企画してくださった和歌山県立医科大学地域医療センターの方々はこの場をお借りして御礼申し上げます。今回の研修で学んだことを忘れずに、将来地域枠の医師になる者として何をしたいのかを考えていこうと思います。2日間大変有意義な研修をありがとうございました。

9 国保すさみ病院



■ 位置 >> 和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見2380

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠4年生

板谷 耀平

1. 実習施設とその地域の概要

● 病院の概要

国保すさみ病院は昭和48年に開設された。(前身である紀南病院周参見分院は昭和22年に開設) 診療科としては内科、外科、リハビリテーション科があり、病床数は一般病床が48床、療養病床が24床ある。なお、療養病床は令和元年7月より休床となっている。

また、平成23年よりすさみ町訪問介護ステーションが開設された。現在は町内で唯一の新型コロナウイルスワクチン集団接種会場となっており、外来診察後の午後に接種が行われている。さらにすさみ病院は週に1回佐本診療所、隔週で大鎌診療所、大附診療所にて診察を行っている。

●地域の概要

すさみ町は紀伊半島の南西部に位置し、白浜町、古座川町、串本町と隣接した人口3,736人（令和3年6月30日現在）の町である。町土の約93%は林野であり、平地はわずかである。海岸線は海岸段丘で吉野熊野国立公園に指定されている。高齢化率は47.8%と高い。

2. 実習内容

日時：令和3年7月28日(水)～7月29日(木)

1日目

11:00～11:30 病院内の見学

高垣院長に施設内の案内をしていただいた。発熱外来や空調を調整する機械についても伺った。

13:30～15:00 新型コロナウイルスワクチン接種と接種前の問診見学

すさみ町ではすさみ病院において新型コロナウイルスワクチンの集団接種が行われており、この日は70名の地域住民（うち10名が15歳以下）が接種を受けに来院された。ワクチン接種前の問診（体調や服薬状況、アレルギーや1回目の接種で問題がなかったかなど）と、実際接種を受けているところの見学をした。

15:30～16:30 気胸患者の胸腔ドレーン挿入見学

山本先生と寺本先生による気胸患者にX線下で胸腔ドレーンを挿入するところを見学した。その後、寺本先生に質問し、患者の状況やドレーンを挿入する方法、ドレーンを抜去するタイミングなどを教えていただいた。

2日目

9:00～10:00 すさみ病院での外来見学

野田先生担当の外来を見学した。体調の変化を患者から聞き取り、血液検査の結果や血圧の変動から服用している薬でコントロールできていることなどを患者に説明し、次回の予約を取るという流れであった。

10:00～11:00 上部消化管内視鏡の見学と生検の施行

食道に異型上皮が見られる患者の1年おきのフォローアップとして上部消化管内視鏡を行うところを見学した。内視鏡を行う際の流れや機械の操作方法、施行時に何を見ているかについて説明していただき、寺本先生に指示してもらいながら鉗子を用いた生検をさせていただいた。

11:00～12:00 地域医療、卒業後についての説明

角野先生、寺本先生、野田先生から地域医療について、卒業後についてなどのお話を伺った。

13:00～15:00 佐本診療所での外来見学

すさみ病院から車で約30分のところにある佐本診療所において、高垣院長による診察を見学した。佐本診療所は山間地域にある診療所ですさみ病院まで来院することが困難な患者に対して週1回診察を行っている。この日は8名の患者が来院され、体調の変化、身体症状、服薬状況などを確認して薬を処方し、生活のアドバイスをしていた。診察中に収縮期駆出性雑音がある患者の聴診をさせていただいた。診察後は診療所内を案内していただき、検査できること、できないことや診察にあたってすさみ病院から持ってくるものなどについて説明していただいた。また、遠隔医療についてのメリット、デメリットについて、他には移動に用いたドクターカーは県内で初めてであり、全国で2番目に導入されたものであることや、その役割についても伺った。

15:30～17:00 災害医療についての説明、気胸について勉強

高垣院長に災害時の対応について質問し、説明していただいた。残りの時間で角野先生からお借りした気胸患者へのアプローチの方法についての本で気胸について勉強した。

17:00～17:15 薬剤の勉強会

サノフィ株式会社から来られた方による超速効型インスリンアナログ製剤のインスリンアスパルトBS注NR「サノフィ」の製品についてのプレゼンテーションを医局内で伺った。

3. 考 察

今回の実習では実際に地域医療を支えている医療現場を見学させていただき、机上の勉強では学ぶことができない大変貴重な経験をさせていただいた。先生のお話にもあったが地域の病院では内科外科関係なく来院された患者に対して処置する必要があるため、本当に様々な領域の知識と技術を身につける必要があると感じた。また、これは地域ならではと考えるが、児童の教育についてのアドバイザーを務めるなど病院や診療所に来院された患者に対して診療するだけではないということも知った。

2日間の実習で最も強く感じたのはコミュニケーションの重要性である。確かに、検査結果やCTなどを正確に読み取る能力は必要であるが、患者とのコミュニケーションを通じて信頼関係を築けなければ共に病気を治していくことは難しいと感じた。信頼関係があるからこそ薬の飲み忘れがある患者に対して強めの口調で服用する大切さを伝えても反発されることなくそれをうんうんと患者は聞き入れてくれるのだと思う。

また、すさみ病院は常勤医師が5名であるが、人手不足であると感じる場面があった。それはワクチン接種を行っているときに心肺停止状態の方を受け入れることができなかったというものである。受け入れることができなかったのは今回が初めてということを知ったが、手の空いた医師がいなかったことから起こったため、人手不足の中で奮闘されている先生方の大変さについても感じることができた。

遠隔医療については推進されているが、困難であることも多いと感じた。実際患者に触れることができないため、外来ではリンパ節の腫脹を見つけることができても画面を通してなら見落としてしまう可能性があること、むしろ遠隔医療の方が時間がかかってしまうことなどである。交通手段など移動に制限がかかっている方にとっては有益であると考えるが、医師への負担なども考慮するとデメリットとなる点も多いと知った。そうした点から診療所において週に1回または隔週に診療を行うということはとても大きな役割を果たしていることが分かった。

2日間の実習を通して地域医療の現状や医療機器の使い方、患者とのコミュニケーションの取り方など多くのことを学ぶとてもよい機会となった。

4. 謝 辞

今回の実習ではすさみ病院が果たす役割の大きさについて実際現場を見学することで感じることができました。今回学んだことを胸にとどめ、将来和歌山県の地域医療を支えられる医師になるべく、より一層勉学に励みます。お忙しい中、高垣院長はじめ、医局の先生方、スタッフの方々、このような貴重な機会を与えていただきありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科3年生

瀧脇 颯太

1. 実習施設とその地域の概要

すさみ町は和歌山県南部にあり総人口は3736人と少ない。しかし、紀伊山地を背に白浜町、古座川町、串本町と隣接し、雄大な太平洋にも面しているため、和歌山県民は勿論のこと大阪府をはじめとする他府県からの観光客が多い。特に夏場の海水浴客が多いとのことで、新型コロナウイルスが蔓延している中ではあるが週末には他府県ナンバーの車をよく見かけるとのことだった。

国保すさみ病院の施設所在地は和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見2380で、付近には特別養護老人ホームはまゆう園とすさみ町訪問介護ステーションがあり、介護療養型医療施設となっている。職員構成としては、看護職員30人、介護職員7人、調理人6人、医師9人、薬剤師1人、理学療法士2人、管理栄養士2人、診療放射線技師3人、介護支援専門員1人、事務員8

人、その他の従業者7人となっている。3階建ての施設ではあるが現在2階は医療行為には使用されておらず、1階で診察等を行い3階で入院患者の受け入れを行っている。国保すさみ病院では町が山間部に開設する佐本診療所、大鎌診療所、大附診療所の3つの診療所への医師の派遣も行っている。大規模な病院とは言えないがすさみ町には他の病院がほとんど無く町の病院と言えば誰もがすさみ病院を挙げる程町の医療の要となっている。また、薬剤の処方についても薬局が院外に1つしかないため、国保すさみ病院内での院内処方が大部分を占める。

国保すさみ病院における医師の勤務内容は多岐にわたり診療開始の9:00までに担当する入院患者の診察を行い、診療時間である9:00～12:00は外来を、午後からは予約外診療や在宅診療、特養老人ホームはまゆう園等での検診、診療所での診療を交代で行っている。医師数が多くないこともあり病院外来といっても内科だけでなく、簡単な外科外来も全員で行っている。月に1度程度ではあるが簡単な手術も行っている。当直は基本的に1人ずつで順番に行っている。

2. 実習内容

〈1日目〉

- 11:00～12:30 院内見学、外来見学
- 13:00～15:00 佐本診療所への訪問診療の見学
- 15:00～17:00 外来見学等

〈2日目〉

- 8:30～9:00 入院患者の診察見学
- 9:00～12:00 外来見学
- 13:00～14:00 訪問診療見学
- 14:00～17:00 外来見学等

患者の病態やその機序、処方した薬剤の薬効、高齢者に特に気を付けるべき病気、カルテの書き方など全体を通して様々なことを教えていただいた。特に印象に残っているのは2日目に同行させていただいた訪問診療である。患者はポケットを形成した重篤な褥瘡を持つ女性であった。これまで地域医療に関する書籍を読む中で、褥瘡という病名はよく目にし、在宅診療とは切り離せない病気であるということを知識として認識していたものの実際の褥瘡というものを見たことが無かった。そのため、今回の実習で悪化した褥瘡を初めて目にして衝撃を受けた。寝たきりやそれに近い患者の在宅診療や入院を行う上で褥瘡の予防と悪化を防ぐことが如何に重要であるかを痛感した。また、そのためにも訪問介護の方やご家族と細めに情報交換することが大切であることを改めて感じた。

3. 考 察

実習を通じて最も強く感じたのはコミュニケーションの大切さとその難しさである。より良い医療を提供するためには病院内での多職種間での連携は勿論重要なことである。当然、看護師との意見交換は入院患者の容態変化を素早く察知するために大切である。また、在宅診療を行う上では介護福祉士やご家族との情報交換は必須である。国保すさみ病院では訪問診療や診療所への派遣、検診も行っており、単一の職種だけでは補いきれない部分が多く存在する。そのため、院内だけでなく院外においても医師や看護師、介護福祉士等の多職種間の関係が良好でこれまで見た病院と比較してもより活発なコミュニケーションが取られているように見えた。また、町内に他の病院がほとんど無い国保すさみ病院であるからこそその地域住民との関わりの深さを強く感じた。これは地域医療の魅力であり、強みであるとともに注意しなくてはならない点でもあると感じた。当然、患者とより親密なコミュニケーションを取ることができれば、効率良く患者の病態を知ることができ、病態の変化にも気づきやすくなる。また、患者の多くが高齢者ということもあり、ご家族との情報交換が重要であるという点でも利点となる。一方で、結びつきが強いと崩れた際の修復が難しく他の患者にも伝播しやすくなる。そのため、患者の多くが顔なじみであるということは一層責任感を持って仕事を行う必要があるということでもある。さらに、親密過ぎる関係は医師と患者という関係性を曖昧にしがちである。適切な距離感でコミュニケーションを取る、それが地域医療において大変重要なことである。佐本診療所への同行で多々見られたのだが、処方した薬を飲まない、頼んだ毎日の血圧測定を行わないなど治療に非協力的な患者にどのようにして協力してもらうのか、軽症ではあるが不安で一杯な患者にどのように安心してもらうか、これはどこで働こうか直面する問題ではある。しかし、他の病院が少なく、医師にとっても患者にとっても互いにその先も関わっていかざるを得ない地域医療においては特に重要な課題である。適切な距離感を保ちつつ、患者に応じた対応をする。適切な医療とは医療に関する知識や技術だけでは成り得ないということを今回の実習で再認識した。

4. 謝 辞

新型コロナウイルスが蔓延し、ワクチン接種等大変忙しい時期に病院実習の受け入れをしていただいた国保すさみ病院の皆様、本当にありがとうございました。2日間にわたり大変貴重な体験をさせていただくことができました。短い期間でしたが、実習を通して地域医療の大変さとやりがいに触れることができましたことを心より感謝致しております。また、実際に勤務しておられる先生方の生の声をお聞かせいただき、生き活きと活躍しておられる姿を拝見できましたことで、医師として働きたいという思いが一層強くなりました。慣れない実習でいろいろと至らぬ点ばかりで申し訳ございませんでした。病院長をはじめ医師の皆様には大変温かく指導していただき、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

10 那智勝浦町立温泉病院



■ 位置 >> 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町天満1185-4

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生

濱田 琳太郎

1. 実習施設とその地域の概要

病院の概要：那智勝浦町立温泉病院は昭和39年7月に開設された。そして平成30年4月に新病院が開設され現在は一般病床120床、診療科目は内科、循環器内科、糖尿病内科、整形外科、リハビリテーション科、眼科であり、救急告示病院・災害支援病院、地域リハビリテーション広域支援センター、臨床研修病院の認定を受けている。温泉病院という名のとおり玄関近くに足湯「悠久の湯」が設置されており当地の温泉を有効活用している。また、リハビリテーション・スポーツ・温泉医学研究所が病院内に併設されており、リハビリテーションに力を入れた病院である。

医療人としての倫理を守り、皆様から信頼され、やさしさといたわりと、そして心に寄り添う医療を提供することを病院の基本理念とし、地域と連携した医療が行われている。

地域の概要：那智勝浦町は、那智山の門前まち那智町と、温泉と漁業のまち勝浦町、さらに宇久井村・色川村の4ヵ町村が合併し、昭和30年4月に誕生した。その後昭和35年1月に下里町、太田村が加わり現在の姿となる。紀伊半島の南東端に位置し、新宮医療圏に属している。気候温暖にして、風光明媚、雄大な自然に恵まれた町である。那智の滝やマグロが有名であり、温泉源泉数も和歌山県最多で魅力にあふれた町である。

2. 研修内容

- | | |
|------------|--|
| 1日目（7月27日） | 病院案内
院長回診見学
カンファレンス |
| 2日目（7月28日） | カンファレンス
病棟見学
外来見学
新型コロナウイルスワクチン集団接種見学 |

今回の研修では地域医療者の先輩である中暁洋先生に対応していただいた。1日目にまず那智勝浦町立温泉病院の案内をしていただいた。温泉病院はリハビリテーションに力を入れており、その設備も充実していた。また、現在コロナ禍ということもあり感染症の感染拡大を防ぐための陰圧室や、感染患者の病室と一般の病室を分けるゾーニングがひと目で分かるように床にテープを貼っていることを説明していただいた。その後、診察室や救急処置室を案内してもらった後に、電子カルテの使い方を教えていただいた。病院案内の次に院長回診を見学させていただいた。院長先生と主治医の先生が内科の入院患者さん全員の様子を見てまわった。1日目の最後にカンファレンスがあった。内科の先生全員でどのような治療をしていくか話し合っていた。また、そのカンファレンスでは自分の担当患者さんについて先輩医師にアドバイスをもらっており1人の医師が1人の患者さんを治療するのではなく、多くの医師が1人の患者さんを治療するのだと感じた。また、先輩医師にアドバイスをもらう機会やもらいやすい環境が整っているのがよく分かった。

2日目は朝のカンファレンスを終えた後、朝の病棟で看護師さんたちがどのように働いているのかを見学した。研修対応していただいた中先生は外来担当ではなかったため、研修医の先生の横について外来を見学させていただいた。症状を聞くところから始まり、疾患の鑑別に至

るまでの流れを確認できた。2日目の最後は中先生に同行し新型コロナウイルスワクチン集団接種会場に行き、問診の様子や会場の様子を見学した。接種会場では那智勝浦町役場の方にワクチン接種の流れや、密にならないようにする工夫を説明していただいた。また、一般の方では見ることができないワクチンを希釈する様子を見学した。ワクチンの希釈はどの段階でも2人以上によるダブルチェックが行われており間違いがないようにされていた。

3. 考 察

今回の2日間、地域医療卒の先輩である中先生について研修させていただいたため、自分の将来像をはっきりイメージすることができた。また、研修を通して人との繋がり大切さを感じた。病院内を見学して、医師だけで医療を担っているのではなく看護師さんや理学療法士さん、作業療法士さんたちとの連携が医療を支えていると感じた。そして医療従事者の繋がりがだけでなく患者さんとのつながりも大切である。今回の研修中に中先生は病院内で見かけた患者さんや、集団接種会場に向かう途中で見かけた患者さんに声をかけ、最近の調子を伺っていた。このようなコミュニケーションをとることで患者さんが親しみを持ってくれ、なんでも相談しやすくなると思う。些細なことでも相談してもらうことで病気の早期発見に繋がる。患者さんとの繋がりを大切にすることが地域医療において重要なことであると感じた。また集団接種においても町役場の方との連携は必須であったことから、地域の医療を支えるためには医師や看護師だけでなく他職種連携が重要である。

那智勝浦町立温泉病院で研修を通して、一人ひとりが責任を持って与えられた役割をこなすだけでなく、カンファレンスで医師同士が意見を交換し合ったり、看護師さんと情報共有したりすることで病院というチームでより良い医療を提供できる、地域の方々や他職種の方との連携で地域としてより良い医療を提供できるのだと感じた。

4. 謝 辞

最後になりましたが、コロナ禍で大変な中、研修を受け入れてくれた山本院長先生をはじめ、対応してくださった中先生、医局の先生方、那智勝浦町役場の方々、ありがとうございました。今回の研修では医師になる上で大切な多くのことを学ばせていただきました。将来自分が医師としてどのように働いているか、そして働くべきかを明確にイメージすることができました。本当にありがとうございました。

11 新宮市立医療センター



■ 位置 >> 和歌山県新宮市蜂伏18-7

和歌山県立医科大学医学部地域医療科5年生

貴田 理香

1. 実習施設とその地域の概要

新宮市立医療センターのある新宮市は、和歌山県、奈良県および三重県の県境が接する紀伊半島の東南部に位置して太平洋に面している。気候は温暖で高温多雨のため水資源や樹木など自然環境に恵まれており、漁業、林業、農業など幅広く盛んに行われている。また、熊野古道や参詣道が世界遺産に登録されたこともあり、観光客も多く訪れている。古くから熊野地方の中心都市として発展してきたが、人口は27558人（令和3年9月1日現在）で減少傾向である。さらに高齢化率は36.9%（令和2年1月1日現在）で和歌山県の高齢化率32.4%（令和2年1月1日現在）と比較しても高くなっており、人口減少や高齢化が顕著である。

新宮市立医療センターは、1947年に開院、2001年に現在地である新宮市蜂伏に移転、現名称に改称している。診療科は内科、腎臓内科、循環器内科、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、リハビリテーション科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、形成外科、放射線科、皮膚科、歯科口腔外科、脳神経内科、呼吸器外科・心臓血管外科の19科があり、病床数は一般病床300床、2類感染症病床4床となっている。また、地域医療連携室や地域包括ケア病棟も設置されている。紀南地方の公的病院では初めて救急病院として告示された施設であり、災害拠点病院、臨床研修病院、地域医療支援病院などの指定を受けている。新宮市および東牟婁郡（那智勝浦町、太地町、古座川町、串本町、北山村）の新宮保健医療圏、田辺市本宮町、奈良県十津川村、三重県南牟婁郡など和歌山県内に限らず医療施設の少ない周辺の地域からの患者数も多く、重要な役割を担っている。

今回研修させていただいた産婦人科では、常勤医師2名で外来や手術などを行っている。外来患者数は約990名/月で、妊娠・分娩を扱う「周産期」、子宮筋腫などの良性疾患及び悪性腫瘍を扱う「婦人科腫瘍」、月経異常や更年期障害、不妊症などを扱う「内分泌」といった産婦人科におけるすべての分野にわたり、高次医療機関とも連絡をとりつつ治療を行っている。手術実績としては、帝王切開、子宮筋腫・子宮内膜症、卵巣良性腫瘍、子宮脱、悪性腫瘍などがある。

2. 研修内容

(1日目) 手術見学

子宮全摘術を見学した。コロナ禍の影響でポリクリでは入ることができない術野での見学だったため貴重な経験をさせていただいた。

(2日目) カンファレンス

3. 考 察

前述のとおり、新宮市は人口減少と高齢化が顕著である。高齢者（65歳以上）と生産年齢人口（15～64歳）の比率は、1対1.5、すなわち、若者から中年の1.5人がひとりの高齢者を支える社会となっている（全国平均は1対2.1）。また、新宮市の出生数は2020年は145人で、前年からは22人減少、10年前からは107人減少している。今後さらに減少していく可能性も指摘されており、その中で妊娠から安全な分娩まで、周産期管理を行う地域に根差した産婦人科の役割は大きいと感じた。出産は女性にとって大きなイベントであり、自分の安心できる地域でその時期を過ごすことができるのは非常に重要であると考えられる。

また、産婦人科は分娩管理のみならず、思春期から更年期・老年期にいたるまで幅広い疾患を扱い、女性の一生にわたってより良い生活を送ることができるよう支える重要な役割もある。自分が住んでいる地域に産婦人科があることで、より安心して生活できると自分自身も女

性として感じるため、地域の拠点病院である新宮市立医療センターが果たす役割は大きく、周辺地域の住民にとって非常に重要であると思った。

4. 謝 辞

最後になりましたが、今回お忙しい中研修を受け入れていただきました出口先生をはじめ、産婦人科の先生方、新宮市立医療センター職員の皆様、研修の準備をしていただきました地域医療支援センターの皆様はこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。実際に地域に赴き、現場をみることで地域で働くことの意義を学ぶことができました。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療卒5年生

小西 朋樹

1. 実習施設とその地域の概要

○実習先の概要

新宮市立医療センターは和歌山県新宮市に位置し、新宮市、東牟婁郡の新宮保健医療圏に加え、田辺市本宮町、奈良県十津川村、三重県熊野市及び南牟婁郡からの広範な地域の人口約12万人の医療対象者を受け持ち、急性期病床を中心としつつ、地域包括ケア病棟を含む304床を擁している。

建物は免震構造の鉄筋コンクリート造であり、地下1階、地上6階建てである。駐車場も522台完備されており、車いす乗用車用も7台あり、障がいのある患者さんに対しても病院に行きやすい環境を整えている。また、病院前にはバスやタクシーなどもあり、医療センターが新宮駅や周囲の駅からは少し離れているものの、公共交通機関を利用しても行きやすくなっている。

診療科目は19科目あり、内科、腎臓内科、循環器内科、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、リハビリテーション科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、形成外科、放射線科、皮膚科、歯科口腔外科、脳神経内科、呼吸器外科・心臓血管外科が互いに連携し合っ

て診療を行っている。また、病床は一般病床300床、2類感染病床4床があり、個室率は24%である。

○実習地域の概要

新宮市は、和歌山県、奈良県および三重県の県境が接する紀伊半島の東南部に位置して太平洋に面し、温暖で高湿多雨な気候風土により豊かな水資源と樹木育成に恵まれた素晴らしい自然環境の中にあり、令和3年8月1日現在、27580人、14689世帯が暮らしている。

歴史的に古くは、神武天皇東征のコースにあって、日本書紀などには熊野神邑と呼ばれ、熊

野信仰の中心都市として栄えた。中世には熊野速玉大社の門前町として発展し、明治以降は熊野材の生産地、製紙業や製材業で繁栄した歴史を持ち、今日まで熊野地方の行政、経済、文化、教育の中心都市として発展してきた。平成16年7月7日世界遺産登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の熊野古道「大雲取越え」「小雲取越え」「高野坂」や川の参詣道「熊野川」など、熊野の海や山や川の織りなす豊かな大自然にあふれている。

文化面では、佐藤春夫や中上健次、東くめ、西村伊作などの多くの文化人を輩出しており、秦の始皇帝の命を受け不老不死の霊薬を求めて熊野に渡来した徐福伝説による中国や台湾をはじめとした多種多様な異文化との交流なども活発に行っている。

熊野文化と豊かな自然を活かし「一人ひとりがまちづくりの担い手」を基本理念とし、地域の活性化を図るとともに、時代の潮流に対応した快適な都市づくりを目指している。そして全ての人と文化が集い交流しにぎわいを見せる、まち全体が華やいだ都市づくりに努めている。また、JR東海とJR西日本の分岐点に位置し、名古屋へは特急で3時間20分位、新大阪へは4時間でアクセスしている。

また国道は、海岸線に沿って国道42号が浜松市と和歌山市を結び、紀伊半島を縦貫する国道168号、国道169号は、京阪神とを結ぶ起点の都市でもある。

2. 実習内容

○実習日程

1日目(8月16日(月))

午前	8:45-8:55	オリエンテーション、更衣
	9:00-12:00	外来見学（一般外来）
	12:00-13:00	休憩
午後	13:00-14:00	外来見学（一般外来）
	14:00-15:00	病棟見学
	15:00-16:00	内視鏡検査見学
	16:00-17:00	自習

2日目(8月17日(火))

午前	9:00-11:00	病棟見学
----	------------	------

○研修の流れ

1日目は午前中から外来見学を行った。外来には指導医の先生と一緒にいき、一般内科の外来を見学した。来院した患者さんは10人程度であったが、消化器、内分泌、呼吸器、膠原病など、診ることになる疾患は多種多様であった。糖尿病やCOPD、*Helicobacter pylori*の除菌治

療の患者さんが多い印象を受けた。特に、新宮医療圏の中で最も上位に位置する病院ということもあり、他の開業医、かかりつけ医などの病院から紹介されて来院した人がほとんどであった。昼休みを挟んで14:00頃まで、外来の見学を行い、患者さんに許可を取って聴診などの診察も行った。

外来終了後は病棟へ行き、指導医の先生が担当している病棟患者さんの診察を行った。病棟に入院されている人も様々な疾患を抱えた人がいらっしやった。ここでも、聴診、打診などの診察を行った。全体を通して、手指衛生と聴診器の消毒を診察が終了することに行い、感染の予防を徹底することを心がけた。

その後、内視鏡検査を見学した。内視鏡検査のポイントや、どのようなことに留意して行っているのかを説明してもらった。下部内視鏡検査も行っており、疾患の早期発見が重要であることが分かった。

1日目は16:00程に終了した。

2日目は病棟見学を行った。昨日診察をした患者さんの診察を行った後、他の先生が担当している患者さんの中で勉強になる症例を呈示され、質問をいろいろとされた。臨床実習で身についた知識をしっかりと整理することができた。1時間程度行い、11:00過ぎに終了した。

3. 考 察

1日目は朝から外来を見学したが、糖尿病や *Helicobacter pylori* の除菌治療、COPDの患者さんが多い印象を受けた。糖尿病は生活習慣、COPDは喫煙が主な原因になるが、これらは生活習慣の改善、特定健診の受診によって早期発見をすることが可能になる。和歌山県の市町村国保・国保組合の健診受診率は36.3%、保健指導の実施率は30.3%となっており、特に40代、50代の受診率は低い。特定健診はメタボリックシンドロームに着目した健診であり、内臓脂肪の蓄積を把握し、生活習慣病の予防を目的としている。メタボリックシンドロームによって高血圧や高血糖が引き起こされることがあるため、早期に発見して治療を開始することができる。また、生活習慣病以外にも、和歌山県の癌検診受診率は全国的に見ても低く、癌の75歳未満年齢調整死亡率は令和元年時点で10万人あたり75.6人と、全国平均の70.0人を大きく上回ってワースト8位となっている。また、肝臓癌の死亡率は佐賀県を上回って全国1位と、不名誉な記録となっている。癌に関しては初期には症状がほとんどなく、症状が現れてからでは手遅れになってしまう場合も多いので、癌検診で早期癌の内に発見することが重要であると感じた。

また、糖尿病に対しては、当然薬物による治療も行うが、それだけではなく、患者さん自身の食生活の改善、運動を行うことが重要になる。そのあたりの指導もしっかりと行っていく必要があると感じた。

病棟実習では、特に輸液と抗生剤の重要性について学んだ。特に、ショックを来したりして血圧が下がった患者さんに対しては輸液を行うことが重要となる。その際、血液ガス、血液

検査の値を鑑み、どのような輸液を行うのか、しっかりと判断することが重要であると感じた。また、感染を起こした場合は抗生剤を投与することが重要であるが、安易な抗生剤の投与は耐性菌の原因となるため、しっかりと原因菌を同定した後は広域ではない抗菌薬を投与することが重要となる。また、治療有効域の狭い、バンコマイシンやテイコプラニンなどの抗生剤に対しては、TDM（Therapeutic drug monitoring：治療薬物モニタリング）を行う必要があり、患者さんの薬物血中濃度を測定し、最適な薬用量、投与方法を決定することが重要である。施設内では、このような抗生剤を使う際には文書を作成する必要があり、どのくらいの用量を誰に使用したのか、厳密に管理されていた。

また、薬物を投与する際は、投与方法、用量をしっかりと決める必要があり、少しずつ増やしていったり、中止する際も少しずつ減らしていく必要があったりと、しっかりと知識を整理しておく必要があると感じた。医師になってからも、漫然と治療を続けるのではなく、効果のある治療を的確に行い、できるだけ患者さんの治療期間を短くすることが重要である。

新宮市立医療センターの内科には、非常勤の先生を除いて10人の先生方がいらっしゃったが、皆仲良く、なごやかであるとの印象を受けた。また、和歌山県立医科大学やくしもと町立病院、南和歌山医療センターなど、様々な他の病院と連携して診療を行っていた。そのため、開業医やかかりつけ医から紹介されたり、和医大病院に紹介したりといった連携がみられた。

新型コロナウイルスの蔓延により、入院している患者さんの家族など、一般の方の面会ができなくなっている中で、患者さんの不安は強いものがある。また、病室がいっぱいで新規の入院を制限することになるかもしれない、とのことであった。できるだけ県民が早期にワクチンを接種し、他の人に感染させない、自分が感染しない対策を行うことが重要であると感じた。感染の収まりは全く見通すことはできないが、医療人になる自分たちが率先して感染を防いでいくことが重要であると感じた。

和医大での臨床実習もなかなか予定通りには行かず、遠隔での実習になっているところもあるが、どのような形であっても、机の上で学んだ知識をしっかりと現場で使える知識にアップグレードしていくことが重要であると感じた。今後の臨床実習に臨むにあたり、もう一度気合いを入れ直す良いきっかけにすることができた。5年生のうちに、しっかりと知識を整理し直し、国試以降にも使える知識をたくさんストックしていきたい。

4. 謝 辞

地域医療枠の夏季実習については、去年は新型コロナウイルスの影響で中止になってしまい、今年も新型コロナウイルスの蔓延に伴い、実習そのものが中止になってしまうリスクもありました。その中で、2日間、しっかりと実習を完遂することができました。最後になりましたが2日間、お忙しい中実習を受け入れてくださり、マンツーマンで指導して下さった内科の中西先生を始めとした新宮市立医療センターの先生方、実習の機会と準備をしていただいた病院

スタッフの皆様、和歌山県立医科大学地域医療支援センターの皆様、和歌山県庁の医務課の皆様、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。この2日間の実習で、臨床実習への心構えをより高めることができ、今後、地域で働くにあたって、医師の姿を明確にイメージすることができるようになりました。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科5年生

松本 和樹

1. 実習施設とその地域の概要

新宮市は、和歌山県南部にある市で、熊野川の河口に位置する。面積255.23km²、推計人口26840人、高齢化率35.10%で、地域医療資源に関しては、一般診療所は、人口10万人あたりの施設数が、全国平均の68.94に対して109.10、病院が6.47に対して10.23、在宅療養支援診療所が11.54に対して20.46、と十分に満たされている。しかし、地域介護資源に関しては、合計の介護施設数は12.40に対して15.10と十分に思われるが、詳しく見ると、訪問型介護施設数は十分であるが、通所型介護施設数、入所型介護施設数、特定施設数が全国平均を下回っており、そのため、入所定員数が入所型、特定施設の両方とも不十分となっている。

新宮市立医療センターは、和歌山県新宮市にある医療機関であり、災害拠点病院や臨床研修病院などの指定を受けている。病床数は、一般病床が300床、2類感染病床が4床である。病室構成は、特別室が4室、クリーン室が4室、1床室が66室、2床室が3室、4床室が55室、2類感染症室が2室となっている。救急指定は2次救急、医師数44名、平均患者数は、外来患者が552.0名/日、入院患者が237.0名/日、救急車搬送患者が5.6名/日、救急外来患者が18.4名/日、心肺停止状態搬送患者が43.0名/年という現状である。診療科は、内科、腎臓内科、循環器内科、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、リハビリテーション科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、形成外科、放射線科、皮膚科、歯科口腔外科、脳神経内科、呼吸器外科・心臓血管外科の計19科である。主な設備としては、リニアック、MRI、64マルチスライスCT、結石破碎装置などがある。

当センターは、広大な範囲の医療圏を持ち、特異な地域性から1次救急から3次救急まで担当しなければならないので、診断、治療に関し非常に重い責任を有している。

市民病院でありながら、入院及び外来患者の約半数は市外からの患者であり、紀南地域の中核病院としての役割を担い、病院規模も病床304床と大きいわけではないが、院内の連携はもとより「地域医療連携支援病院」として、地域医療の発展に貢献している。関連大学としては、三重大学、奈良県立医科大学、和歌山県立医科大学がある。

2. 実習内容

1日目

13:00～14:30 内科外来見学、院内説明

14:30～15:45 内視鏡室見学

15:45～17:00 救急外来見学

2日目

9:00～11:30 内科新患外来見学

3. 考 察

新宮市立医療センターでは、内科は、一般内科、腎臓内科、循環器内科、脳神経内科に分けられており、消化器内科、呼吸器内科、リウマチ・膠原病内科、内分泌内科、血液内科は一般内科に分類される。

今回担当していただいた先生は、和医大の消化器内科に入局されているため、一般内科の医師として働かれていた。そのため、消化器内科の医師であっても他の内科の内容も診察しないといけないため、その分大変だが、様々な力がつくと感じた。しかし、消化器内科の先生であるので、担当となる患者は消化器系を中心に回してもらえるとといった配慮もあるようだ。また、大学病院に比べ、医師数が少ないため、消化器内科だと、上部内視鏡や下部内視鏡の検査は積極的にしていくことができ、技術を磨きやすいと感じた。

内視鏡室見学では、腸管へのステント留置を見学した。今回の症例は、腹膜播種による腸閉塞が生じていたため、ステント留置を行う症例だった。

救急外来見学では、内分泌内科に入局されている女性の先生に教えてもらった。症例は、88歳女性の方で昼食前に2回嘔吐、来院前に1回嘔吐があり、便秘にもなっていたため、癒着性イレウスを疑い、検査を行った。

2日目の内科新患外来見学では、主に連携している開業医からの紹介による患者さんの診察を行っていた。地域医療連携支援病院として、開業医との連携をスムーズに行い、拠点病院での処置が必要なのか、開業医に任せても大丈夫なのか、患者さんの状態に見合った医療を適切に判断し効率よく提供していくことが重要だと感じた。また、この見学では、実際に問診の練習をさせてもらった。4年生で受けたOSCEを思い出しながら行ったが、習ったことを全て聞くのではなく、実際には、患者さんの状態に見合った問診内容を考えて聞かなくてはいけないので、少し時間がかかってしまった。そのため、今行っている臨床実習の場で、この力を少しでもつけられるようにしなくてはいけないなと感じた。

この2日間の実習期間で、大学病院とは違い、各科の医師数が少ないことから、患者に対する医師としての責任感の大きさ、協力しあって解決するチームワークの大切さを学んだ。また、相談したいことがあれば、指導医の先生に気軽に聞くことができるような雰囲気であったので、

様々な事例を様々な観点から解決していく力を身につけることができ、将来、地域に根ざした医療を提供するという自身の目標に必要であると感じた。

また、新宮市では、この先、人口減少と高齢化がますます進行していくと推測されているため、医療提供はもちろん、介護資源の提供も重視していかなくてはならないと思っている。そのため、病院と介護施設との連携の強化や在宅医療の拡大、通所型・入所型介護施設の増設も考える必要があると感じた。

4. 謝 辞

お忙しい中、私たちの実習を受け入れてくださった中井院長をはじめ、兼久先生、新宮市立医療センターの皆さま、今回の病院および病院研修を企画して下さった和歌山県立医科大学地域医療支援センターの方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科4年生

塩塚 諒

1. 実習施設とその地域の概要

新宮市立医療センターは新宮市、東牟婁郡の新宮保健医療圏に加え、田辺市本宮町、奈良県十津川村、三重県熊野市及び南牟婁郡からの広範な地域の人口約12万人の医療対象者を受け持ち、急性期病床を中心としつつ、地域包括ケア病棟を含む304床を擁している。次に新宮市立医療センターの診療概要について述べる。新宮市立医療センターの診療科目は内科、腎臓内科、循環器内科、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、リハビリテーション科、脳神経科、整形外科、泌尿器科、形成外科、放射線科、皮膚科、歯科口腔外科、脳神経内科、呼吸器外科・心臓血管外科の19科が存在し、病床数は一般病床が300床、2類感染病床が4床となっている。また病室構成は、特別室が4室、クリーン室が4室、1床室が66室、2床室が3室、4床室が55室、2類感染症室が2室であり、個室率は24%である。

次に新宮市の概要について述べる。新宮市は面積が255.23km²（境界未定部分あり）で、総人口が26,840人（推計人口、2021年8月1日）である。また隣接自治体には田辺市、東牟婁郡古座川町、那智勝浦町、三重県熊野市、三重県南牟婁郡紀宝町、奈良県吉野郡十津川村がある。新宮市は熊野川の河口の西側に位置し、熊野三山のひとつである熊野速玉大社の鳥居前町として栄えており、熊野本宮大社への入口として、熊野川の舟運を利用した木材の集散地でもあった。1933年に東牟婁郡新宮町・三輪崎町が合併して新宮市が発足し、2005年に旧新宮市が東牟婁郡熊野川町と合併して現在の新宮市となった。

2. 実習内容

1日目

午後12時に新宮駅に到着し、午後1時から実習を開始した。

まずは診断的治療としてのブロック注射の見学をさせて貰った。これは痛みの原因となっている神経を特定するとともに、麻酔により痛みを和らげることを目的としているものであり、実際に複数の医師が連携を取りながら原因神経を特定する様子を見学した。

次にwalk inで救急に来られた患者さんの診察を見学した。患者さんは船員の方で、発熱、倦怠感、頭痛があるとのことで近くの病院で熱中症の診断となり、NSAIDs等処方されていた。しかし症状が持続し、嘔吐もあるとのことで新宮市立医療センターに紹介という形で来院された。そして様々な検査を行った後、髄膜炎疑いで腰椎穿刺をすると淡血性の髄液が認められ、頭部CTを行ったところ、大脳半球間裂にくも膜下出血が認められた。また頭部MRIではMRAでAcomに約3mm径の動脈瘤が認められたが、FLAIRでくも膜下出血ははっきりとしなかった。

2日目

午前9時から実習を開始した。

まずは容体が急変した患者さんの対応を見学した。症状は頻脈で、心エコーを行ったところ駆出率が20～30%と低下していた。また胸部X線でbutterfly shadowがみられたことから心不全が疑われ、心電図を行ったところnarrow QRSでP波が消失しており、RR波が等間隔であることからPSVTを疑い、ATPを急速静注した。

最後に外来で来られた患者さんの診察を見学した。今回来られた患者さんは扁桃腺が腫れており、外来での治療中の方であった。患者さんの許可をいただき、実際に扁桃腺を見させて貰った後、6 sore throatやred flag signについて学んだ。

3. 考 察

まず初日を終えての感想・考察を述べる。最初に行ったブロック注射の見学では、患者さんへの声掛けを含め、現場の医師の連携の素早さを体感した。次に救急に来られた患者さんの診察では、まず発熱、倦怠感、頭痛といった症状から容易に熱中症と診断してはならないと肝に銘じた。さらに頭部CTで見られたくも膜下出血も非常に分かりにくく、座学では分かりにくいものもあるという知識はあったが、実際の頭部CTの難しさを実感した。

次に2日目を終えての感想・考察を述べる。容体が急変した患者さんの対応については非常に難しく、胸部X線や心電図の所見についても非常に勉強になった。また座学で学んだ症状・所見、疾患、治療法を実際に見て、複数の医師が判断する様子から将来の医師像がまた1つ明確なものとなった。

そして外来で来られた患者さんの診察では、実際に舌圧子を使う機会をくださり、扁桃腺の

様子を診させて貰ったことが非常に良い経験となった。また臨床で大事な兆候などを教えていただき、知識・経験ともに成長することができた。

4. 謝 辞

今回の夏季病院実習では、ある程度の専門知識を有した上での病院実習ということもあり、非常に学ぶことも多く、将来に向けての貴重な経験となりました。今回の実習で担当して下さった山本章先生を始め、実習する上で様々なことを教えて下さった新宮市立医療センターの諸先生方、またこのような貴重な経験の場を設けて下さった諸先生方、お忙しい中時間を割いてくださり本当に有難う御座いました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生

岩田 拓巳

1. 実習施設とその地域の概要

実習施設：新宮市立医療センター

新宮市立医療センターは、新宮市、東牟婁郡の新宮保健医療圏に加え、田辺市本宮町、奈良県十津川村、三重県熊野市および南牟婁郡からの広範な地域の人口約12万人の医療対象者を受け持ち、急性期病床を中心としつつ、地域包括ケア病棟を含む304床を擁している。また、地域医療連携室を設置しており、その内容は他院や診療所からの患者さんの受け入れと他病院への紹介、退院時の医療介護の調整、地域支援病院運営委員会の開催、医療介護に関する研修会の実施、在宅医療相談窓口など多岐に渡っている。地域医療連携室の一番の目的は、患者さんの希望を踏まえ適切に治療を受け、生活できるように各診療科につなぐことである。そのために、他病院や診療所、介護施設、訪問介護ステーション、院外薬局等、地域の方々との連携を密にし、情報の共有化を行うことを重視している。新宮では、高齢化や人口減少が起きており、特に高齢者にとっては急性期治療だけでは不十分であり、老化や病気などから、若い人と同じ生活はできず、医療と介護のサービスが必要となってくる。そこで上記のように様々な医療従事者の方々と密な連携を取り、アフターケアなどにも力を入れている。

2. 実習内容

実習時間：7月28日の昼から17時頃まで、7月29日の午前中

1日目は、新宮市立医療センターに設置されている診療科の見学および、内視鏡検査の見学、ERCPの見学を行った。また、実際に地域医療枠で卒業された先輩から、卒業後の経験などを通じて地域医療がこういったことを行うかについてや診察する際に注意すること、学生中およ

び卒業後に医学について勉強するに当たって、どのような心構えで行うかについて詳しく教えていただいた。2日目は、1日目と同様に内視鏡の見学を行った。

3. 考 察

今回の病院実習では、実際に和歌山県立医科大学の地域医療枠から卒業された先輩と1対1で付き添わせていただいたため、これからの医学に対する姿勢など非常に勉強になる良い機会だった。実習のはじめに、癌を患っている患者さんの診察を見学させていただいた。先生は診察中、患者さんおよびその家族の方と目を合わせ、患者さんにわかりやすいように言葉を慎重に選びながら話していた。その姿は、自分自身が理想の医師像として思い描く、患者さんと親身になって治療を行っており、話し方や言葉の選び方を実際に目の当たりにすることで非常に勉強になった。特に、診察後の先生の話が衝撃的だった。その話の内容は、患者さんに寄り添うことについてだった。自分が考える患者さんに寄り添うということは患者さんと医師の間に信頼関係を築き上げ、患者さんが症状であったり、生活について気軽に相談できる状態であったり、治療することだけを目的とするのではなく、患者さんの生活背景なども含めて考えることができることであった。このように患者さんに寄り添うというと、信頼関係を築くなどとすぐに言葉として出てくるが、漠然とした考えであり実際にその信頼関係を築くためにどのように行えばいいかなどについてはあまり考えられていなかった。先生の話で、そのことについて深く考える良い機会となった。先生の話では、研修医になった途端、患者さんに対して敬語を使わず、ため口を使うようになる医師がいるとのことだった。はじめそれを聞いたときは、その医師が医師になったことで偉そうになってしまったからなどと、その言動はあり得ないなどと考えていた。しかし、先生の話をもっと聞き進めると、患者さんにため口を使った医師はため口を使うことでフレンドリーに接し、患者さんと医師という関係から隔たりをなくし、親身になって信頼関係を築くために行っていると聞いた。ため口を使う先生の中には、言葉を選びながらそのように行うことで患者さんとの距離を詰め、うまくしている先生もいるという。なので、患者さんとの距離感を詰めて、信頼関係を築き上げる方法の一つとして完全に間違っている訳ではないだろう。しかし、自分がそのような医師がいると聞いて感じた内容のように、その方法を行うことが失礼に感じたり、急激に距離を詰められることに対して不快に感じる患者さんも多くおり、時と場合によるが患者さんに対して敬語をしっかり使うべきであり、患者さんに親身になるための方法を間違えてはいけないということを教えていただいた。自分が患者さんに親身になろうとしたり、信頼関係を築きあげようとしてとった行動が、逆に患者さんとの信頼関係を築き上げるための妨げになったり、不快感を与えてしまうことがあると知ることができた。この話を聞いて自分も知らなければ、よかれと思って行ってしまっていた可能性があると考え、患者さんと信頼関係を築くための方法（親身になる方法）についてこれからの学生生活中や医師になってからの中で考えていかななくてはならない課題だと感じた。また、

先生の話で研修医が終わるとすぐに一人前の一人の医師として地域医療に従事しなければならないため、研修医中や学生中にしっかりと勉強を学ばないと、右も左もわからないまま一人の医師としてかり出され苦勞をすると聞き、勉強を行うモチベーションがあがり、非常にありがたい話だった。

今回の実習では、もちろん医師の仕事について勉強させていただいたが、特に地域医療の医師として働く心構えや信頼される医師のあり方について深く考えさせていただき勉強させていただき良い機会となった。この度の経験を活かしながら、勉学に励んでいきたいと思う。

4. 謝 辞

この度はコロナ禍で大変難しい中、夏季病院実習を計画してくださった地域医療支援センターの先生方、私たち学生のために実習を引き受けてくださった新宮市立医療センターの皆様、そしてお忙しい中、2日間付き添って教えてくださった加山先生に心より感謝申し上げます。もうすぐで学生の折り返しにあたる時期に、このような機会を設けていただいたことで、再度自分が医師を目指し始めたきっかけについて深く考えることができました。また、これから医師になるにあたっての自分の課題を見つけることができました。ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療専攻3年生

北畑 亮歩

1. 実習施設とその地域の概要

新宮市立医療センターで実習を行った。新宮市立医療センターは東牟婁郡及び三重県南部、奈良県南部をカバーする急性期病院である。地域との連携も強く、地域医療連携室が設置されている。地域医療連携室の一番の目的は、患者さんの希望を踏まえ適切に治療を受け、生活できるように各診療科につなぐことであり、急性期医療で救命するだけでなく、退院後地域社会で楽しく生活できることをサポートするため、リハビリテーションに力を入れ、行政・在宅医療・介護の関係者との連携を進めている。また、周辺地域は、高齢化、人口減少、それに将来必ず起こる南海地震や異常気象による災害からは無関係ではいられず、地域全体での対応が急務である。高齢者にとっては、病気や老化などから、若い人と同じ生活はできず、医療と介護のサービスがより必要になる。そのため、新宮市立医療センターは地域との結びつきを強くすることを進め、医療・介護・予防・生活支援が住み慣れた地域で包括的に確保される「地域包括ケアシステム」を円滑に進めている。

2. 実習内容

実習は7月28日、29日の2日間行った。28日は昼から、まず新宮市立医療センターの見学を行った。その後、内視鏡検査の見学をした。臨床的な知識が乏しいため、すべてを理解することは難しかったが、先生が途中で身体の構造を実際に検査しながら教えていただいた。また、内視鏡検査の特徴や仕方なども少し学んだ。

2日目の29日は午前中に外来の見学をした。患者さんは高齢者の方が多く、がんを患っている患者さんが多かった。病気の特徴や接し方など教えていただいた。午後からは、内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）の見学を行った。内視鏡的粘膜下層剥離術とは、早期がんの中でもさらに早期の病変に対して、内視鏡を用いて消化管の内腔から粘膜層を含めた粘膜下層までを剥離し、病変を一括切除するという治療法である。実際にその場にあった教科書を見ながら、手術を見学することができ、この治療法の仕組みや利点を理解することができた。

3. 考 察

今回の実習では先生と1対1で、実際に先生がどのように働いているかを詳しく知ることができた。まず、外来の見学のときに、先生と患者さんの距離感が理想的だなと感じた。患者さんに対する接し方や治療の説明だけでなく、患者さんの背景や家庭的事情など患者さんについて詳しく知っており、それを踏まえて会話していた。それによって、医師と患者の信頼関係が生まれ、患者さんとの距離が近くなっていると思った。医師としての知識や治療法などを身につけることに加えて、患者さんに合った接し方・言葉遣いなども身につける必要があると感じた。また、内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）の見学はとても印象的で、手術を行っている先生の姿を見て、学生の勉学のモチベーションが上がり、医師になってからも努力し続けることが必要だと感じさせられた。そう思うと同時に、実際に研修医になってからが大変で一人前の医師になるには長い道のりが必要だと思った。今までの病院実習では臨床的な知識がほぼなく、内容を理解することが難しかった。しかし、今回の実習では、実際の処置を近くで見ることが初めてで、がんについて少し授業で触れたことがあったので、詳しく先生の行う内視鏡的粘膜下層剥離術の仕組みや手術後に先生が説明してくれた内容を理解することができた。また、先生の話聞く中で、医師3年目からは1人の医師として働かなければならないため、研修医で多くのことを勉強し経験しておくことが必要だと思った。

4. 謝 辞

このたびはお忙しい中、2日間貴重な機会をいただきありがとうございました。実際に先生が働いている姿を見学させていただき、医師として必要な知識や患者さんとの接し方を学ぶことができました。

初めて新宮市立医療センターに伺い、緊張している中で、先生方の丁寧な説明・指導をいた

だき、心より感謝しております。この実習から学んだことを将来の自分に生かしていきたいと思えます。

ありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠3年生

山路 千咲

1. 実習施設とその地域の概要

新宮市立医療センターは和歌山県新宮市蜂伏に位置しており、一般病床数は300床、その内包括ケア病床は50床、2類感染症病床は4床である。また、和歌山・三重・奈良で共通運用されているDrヘリポートも設置されている。診療科は内科、腎臓内科、脳神経内科、外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、呼吸器外科、心臓血管外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、形成外科、麻酔科、放射線科、歯科口腔外科、リハビリテーション科の19科が置かれている。新宮市立医療センターが担う医療圏は新宮市、東牟婁郡、三重県南部、奈良県南部であり、人口では6万5千人、近隣地域を含めると約10万人が医療対象となっている。加えて地域医療支援病院であり、地域包括ケアや地域医療・介護連携の推進に取り組んでいる。また災害拠点病院でもあり、主に保健医療圏域内における災害時の医療活動の中心的役割も担っている。新宮市立医療センターが位置している新宮市は、和歌山県の東南端にあり、面積は25,523ha、総人口は27,579人（令和3年7月1日現在）で、14,678世帯が暮らしている。

2. 実習内容

●実習1日目

13:00～14:00 挨拶・院内見学

14:00～14:30 腹水穿刺見学

過剰な飲酒などが原因で起こるアルコール性肝硬変の女性に対する腹水穿刺を見学した。腹水穿刺とは、腹腔内に貯留したタンパク質を含む体液を経皮的に穿刺することで検体採取や排液を行うことである。今回の腹水穿刺は、この患者に発熱がみられたことから、発熱の原因を検査するために行われ、この腹水の検査結果によって治療方針が決定される。腹水穿刺ではまずエコー検査によって腹水の貯留部位を確認し、穿刺部分を中心に消毒を行っていた。そして腹部に局所麻酔を行った後、腹水穿刺が行われていた。患者の腹部は腹水の貯留により非常に大きく膨らんでいることが確認された。またエコー検査では、腹水は黒く観察され、腸は白く観察されているのが確認できた。

14:30～16:10 内視鏡検査見学

内視鏡検査の見学では、大腸内視鏡検査と内視鏡的逆行性膵胆管造影法（ERCP）を見学した。大腸内視鏡検査では、カメラがついたチューブを肛門から挿入し、直接大腸粘膜を観察することができる。また、ポリープや初期の大腸がんなどを切除することも可能となっている。続いて見学したERCPは、胆道・膵疾患の診断と治療において重要な検査であり、内視鏡を口から十二指腸まで挿入し、胆管や膵管に細いチューブで造影剤を注入して異常を調べたり、治療を行う検査のことである。今回行われていたERCPは総胆管結石を取り除くために実施されていた。

●実習2日目

13:30～15:00 外来見学

外来見学では内科での外来を見学し、主に糖尿病の患者に対する外来であった。外来に来ていた糖尿病患者の多くが2型糖尿病であり、食生活の改善や運動、薬物療法が主な治療として医師が診療を行っていた。

3. 考 察

腹水穿刺は、患者に対して今から何をするのかなどを医師が丁寧に説明しながら行われており、看護師とのコミュニケーションや連携も取れていたため、作業がスムーズに行われることが可能となっているのが見学していてとてもよく伝わってきた。また、今回の腹水穿刺は発熱の原因を調べる検査のために一定量を採取するのに加え、溜まった腹水を少し減らすためにも行われていた。この治療において、腹水にはアルブミンなどのタンパク質が含まれていることから、腹水を抜きすぎると栄養不足となりさらに腹水が貯留しやすくなってしまうため注意が必要であることも学ぶことができた。

続いて大腸内視鏡検査では、内視鏡を一度盲腸辺りまで挿入してから検査・治療が始まるため、挿入する技術が必要であり難易度が高く、時間がかかるということを知った。その一方で、内視鏡を用いてがんやポリープを早期に発見することができ、さらにそれらを取り除く治療を行うことも可能である。このことから、メスを用いて開腹手術を行うなどの侵襲的な治療をせずにポリープや腫瘍を切除でき、患者に対して負担を軽減することが可能となっている。またERCPでは実際に操作して結石を取り除く作業をする医師と、外から撮影した画像を見ながら指示を行う医師によって治療が行われていた。直接見ることができない状態で結石を取り除くためには高度な技術が必要であると考えられ、また外から指示を行う医師とのコミュニケーションが取れていることも求められると考えられた。

最後に外来見学において、糖尿病は主に普段の生活習慣によって引き起こされる疾患であることから、その指導も行う必要があると考えられる。今回の外来において、医師は高圧的ではなく、ゆったりとした口調で患者と接しながら指導を行っていることが印象的であった。また、糖尿病の改善には健康的な食生活や運動などが必要であり、肥満を解消することが求めら

れる。それには患者自身の肥満度や適正体重を把握しておくことが重要であることを学んだ。さらに、患者の家庭事情なども考慮して入院する時期や治療方針を検討することや、外来では次にその患者が来るのが一ヶ月後であったりするため、10分程の間に伝えられることをしっかりと伝えることが重要であることが分かった。

4. 謝 辞

この度は、二日間にわたり実習の機会を与えていただきありがとうございました。お忙しい中にもかかわらず、大変貴重な経験をさせていただきましたことを、岩橋先生をはじめ、新宮市立医療センターの先生方に心より感謝申し上げます。今回の実習経験を生かし、地域医療に貢献できるような医師になれるように日々励んでいきたいと思っております。

12 新宮市立国保熊野川診療所



■ 位置 >> 和歌山県新宮市熊野川町日足322

和歌山県立医科大学医学部地域医療卒5年生

谷地 晃

令和3年度地域医療卒夏季病院実習として8月19日、20日の2日間、和歌山県新宮市熊野川町にある新宮市立熊野川診療所にて実習を行った。以下、その内容を報告する。

1. 実習施設とその地域の概要

新宮市熊野川町は市街地のある新宮市中心部から路線バスで40分ほどの山間に位置する町である。人口は令和3年7月末の時点で721世帯、1181人と小規模な町である。平成17年の旧新宮市との合併、平成23年の紀伊半島大水害を経て、若年者の町外移動により人口は減少の一途をたどり、高齢化率も49.11%と高い水準となっている。熊野川診療所では医師1人、看護

師3名の体制をとり、高齢化の進む熊野川町民や隣接する三重県、奈良県の一部住民に医療サービスを提供している。町内には他に医療機関はなく、開業医院も近くて旧新宮市内や田辺市本宮町まで行かなければならないことから、熊野川診療所は唯一の医療機関である僻地診療所として住民の日々の健康の維持に極めて重要な役割を果たしている。業務内容としては、外来、月1回の往診、別の地区である玉置口診療所と小口診療所での出張診察があり、一般的な内科を幅広くカバーしている。救急疾患は場合によって新宮市立医療センターに搬送し、眼科、耳鼻科、整形外科、皮膚科領域の疾患は同センターや新宮市内の専門開業医に紹介することが多い。定期的に受診される、かかりつけ患者は約300人である。

2. 実習内容

8月19日、20日ともに、熊野川診療所に赴任されている地域医療卒医師8年目の川端大輝先生のもとで実習を行った。

8月19日

まず、9時過ぎから12時まで外来の見学を行った。外来は予約制で30分に2～3人程度のペースで診察が行われた。地域の診療所という特性上、来院する患者は特に緊急を要する疾患を抱えておらず、診察内容としては問診や血圧測定、採血から既往疾患の経過の観察をし、薬を処方することがほとんどであった。検査が必要であればエコー、心電図、レントゲンが設置されているが、この日は必要とならなかった。

午後は14時より月1回の往診に付き添った。往診は現在8人がかかりつけとなっているが、この日はそのうち4軒を訪問した。往診は川端先生と看護師さん1人、ドライバーの方のチームで行われている。熊野川町のような交通手段と人手の限られる山間部において、寝たきりの夫（妻）を抱える高齢者夫婦や一人暮らしの患者にとっては診療所にアクセスすることが極めて困難な場合も多く、往診は貴重な医療機会となっている。往診では患者への身体診察や励ましの声かけをするだけでなく、同居する介護者の方に対しても介護生活での不安や悩みを親身に聞き出し、寄り添う姿がみられた。約2時間の往診後、診療所に戻り、1日目の実習を終了した。

8月20日

2日目も前日同様、9時より外来を見学した。この日の外来では血圧の測定を担当させていただいた。また、心電図とレントゲンの検査の様子を見学することができた。午後の外来は、診察日に該当する地区に住んでいる住民を対象とし、住民4人がタクシーに乗り合わせて来院した。このように、地区ごとに診察日程が予め決められ、その日程で町営タクシーが送迎サービスを行うという体制もとられていた。外来終了後、前日に往診で伺った患者の家族から、調子が悪いとの連絡があり、定期的な往診とは別に、予定外で往診を実施した。往診から戻り、2日間の実習を終了した。

3. 考 察

今回は初めての僻地診療所での実習ということもあり、普段ポリクリで実習を行う大学病院や地域拠点病院との明確な違いを実感しながら、僻地診療所特有の業務内容、診療体制を知ることができた。僻地がしばしば抱える問題点として、高齢化率が高く、交通の利便性も悪いため、医療を必要とする人々が医療資源にアクセスできないということが挙げられる。熊野川町もまさにその様な状況にある。熊野川診療所ではこの問題の解決のために往診、別の診療所への出張診察、町営タクシーによる地区ごとの送迎サービス等、様々な方法がとられていることを学び、これらを組み合わせることによって必要な医療が提供できていることを実感した。また、川端先生の働かされている姿を見て、僻地・地域医療に従事する身として勉強になることが多々あった。川端先生は赴任されてまだ4か月であったが、外来や往診の様子から、地域住民との強固な信頼関係を感じ取ることができた。これは川端先生がこの地域を好きになって、この地域に溶け込まれているからこそその信頼関係であると考えられる。川端先生は業務を離れた部分でも地域住民とのコミュニケーションを大事にされており、休日に行われるゲートボールの集いに顔を出したり、診療後に日課とされているランニング中に出会った患者と積極的に挨拶されたりと医師と患者の関係だけでなく人と人との関係として、良い関係を築かれていた。これは先生の人柄あってこそその関係なのかもしれないが、自分の理想とする姿であると実感し、目指していくべきだと大いに感じた。

このように本実習では僻地医療を体感しながら、将来従事することを具体的にイメージし、目標とする医師像を明確にすることができた。

4. 謝 辞

今回の実習では、川端大輝先生をはじめ、熊野川診療所の方々に大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。親身になってご指導いただき、地域の診療所特有の機能を知り、地域住民に対する先生方の姿勢を間近で見学できたことは、近い将来地域医療に従事する私にとって非常に貴重かつ大きな経験となりました。ありがとうございました。

保健所実習

〈保健所〉

令和3年7月30日(金)～8月19日(木)の1日間、地域医療枠1年生(計10名)が県内5か所の保健所に分かれて実習を行いました。それぞれの保健所では、所長先生や職員の皆様から保健所の概要について講義を受け、保健所事業の見学をさせていただいたことで、医師を志す者として保健行政や公衆衛生の現場を体験することができました。



●参加者名簿

実習先	学年	氏名	実習対応医師名 (保健所長名)
① 橋本保健所	1年	奥村 麗 吉岡 咲季	池田 和功先生
② 岩出保健所	1年	小林 太基 中西晴奈加	雑賀 博子先生
③ 湯浅保健所	1年	石田 聖葉 中西 歩登	松本 政信先生
④ 御坊保健所	1年	東本 胡桃 吉益 実咲	新谷 浩子先生
⑤ 新宮保健所	1年	樋上 和真 山本有美恵	和田 安彦先生

1 橋本保健所



■ 位置 >> 和歌山県橋本市高野口町名古屋 927

和歌山県立医科大学医学部地域医療科1年生

奥村 麗

1. 実習施設とその地域の概要

橋本保健所は紀北の中でも橋本市、かつらぎ町、九度山町、高野町を管轄しており、令和2年4月1日現在の推計人口は83,206人となっている。また、橋本保健所は総務福祉課、保健課、衛生環境課の3つで構成されており、新型コロナウイルス感染症についての業務は保健課が中心となってPCR検査や陽性者、濃厚接触者への聞き取り調査などを行っている。地域の特徴としては、奈良県や大阪府に隣接しており、電車や高速道路があって和歌山県の中でも他府県へのアクセスが優れていることから、ベッドタウンとして栄えている。新型コロナウイルス感染症が蔓延するまでは、高野山が世界遺産に認定されたことから外国人観光客も多く訪れていた。

2. 実習内容

はじめに所長にそれぞれの課の業務の説明をしていただいた。そのあとに防護服に着替え、保健所の駐車場で行われている新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者のドライブスルーでのPCR検査の様子を見学し、実際に体験もさせていただいた。次に車に乗って訪問という形でのPCR検査に同行した。毎日3軒ほど回るそうだ。高齢の方のお宅に訪問した際には、雑談も交えながら慣れない検査の不安を取り除くような工夫をされていた。保健所に戻ってから、職員の方の所長へのコロナの調査報告を聞かせていただいた。当時の状況やどこまでを検査対象とするかなど、細かく会議されていた。午後からはオンラインで開催された病院や施設の保健師などを対象とする研修を見学した。所長が講師となり、様々な質問や疑問に答えられていた。終了後、保健所内の施設を案内していただき、最後には所長から地域医療についての話をしていただいたり、我々の質問に答えていただいたりした。

3. 考 察

コロナ禍になってから「保健所」というワードを耳にする機会が格段に増えたが、実際どのような業務を担当しているのかは詳しく知らなかった。今回の研修を通して、現在ではやはりコロナ関連の業務が多くなっていて、PCR検査で陽性者を把握してから、濃厚接触者・検査対象者の判定、状況の聞き取り調査と整理まで行っていることが分かった。橋本保健所管内は高齢者の世帯も多く、訪問でPCR検査を実施する必要性も高いと感じた。また、PCR検査を体験させていただいた際に、随時消毒を行ったり、防護服の脱ぎ方や机の拭き方を教えていただいたりしたことで基本的な対策が大事だと改めて認識した。さらに、研修も定期的に行われており、各施設での対応や管理の大切さを再確認してもらい、情報を共有することで、感染しない、感染を広げないための活動をすることも重要だと感じた。

4. 謝 辞

実習ができるかどうか不安定な中、池田所長はじめ保健所職員の方々、貴重な時間を割いて実習を受け入れてご指導いただき、本当にありがとうございました。また、厳しい状況ではありましたが、実習を計画していただいた地域医療支援センターの先生方に感謝いたします。この研修で学んだことを忘れず、将来医師になるものとして十分活かしたいと思います。

1. 実習施設とその地域の概要

橋本保健所は伊都振興局健康福祉部ともいわれ、橋本市、かつらぎ町、九度山町、高野町の1市3町からなる医療圏を管轄している。2015年時点での1市3町の総人口は88,342人、また高齢化率は31.60%であり、和歌山県全体の高齢化率30.90%と比較すると、平均よりも少し高い値となっているⁱ。当保健所では、社会福祉、健康相談、衛生環境対策等、福祉、保健、医療に関する業務を行っているⁱⁱ。また、橋本医療圏内には、橋本市民病院、医療法人南労会紀和病院、紀の郷病院、和歌山県立医科大学附属病院紀北分院、社会医療法人博寿会山本病院の5つの病院がある。

橋本市について、大阪からの転入者が多く、これらの新住民の人たちを和歌山府民と呼ぶこともある。また、高野七口と呼ばれる高野山への7つの街道の1つである黒河道があり、霊峰高野山への参詣口として機能してきたⁱⁱⁱ。

2. 実習内容

午前中はまず保健所でのPCR検査の様子を見学した。厳重な感染症対策の中、ドライブスルーのような形で検査を進めていた。次に、訪問PCR検査に同行させていただいた。保健所に来ることが難しい人のために、家を訪問してPCR検査を行っていた。保健所へ戻ると、保健所で働く方々の役割について教えていただいた。いくつかの課に分かれて業務を担当しているみたいだが、お互い協力して業務をしている様子も見られた。その後、PCR検査の結果や様々な人の行動履歴について情報を整理し、次にどういう対応をしていくかを話し合う様子を見学した。

午後からは、地域の福祉施設などに向けて、新型コロナウイルス感染症への対策会議が行われた。新型コロナウイルス感染症についての情報を提供し、地域一体となって感染症対策に取り組んでいこうという熱意を感じた。その後、再びPCR検査の結果について情報を共有し、話し合っているところを見学した。また、保健所内を案内していただきながら、コロナ感染症対策以外の保健所の仕事や役割について学ぶことができた。

3. 考 察

今まで保健所とはどういう役割を担っているのか全く知らず、新型コロナウイルス感染症の流行による連日の報道によって、その一部を知った程度であった。しかし今回の実習を通して、保健所は地域住民の心身の健康を支える重要な役割を担っていることを学んだ。

新型コロナウイルス感染症に関しては、徹底的なPCR検査を行うことだけでなく、他の機関への情報提供も保健所が中心となって行っている様子を目にして、コロナ禍での保健所の重要性をひしひしと感じた。

また、本来の保健所の役割として、所長の「地域のひとや他の行政と協力して物事を動かし、業績を分かち合う」という言葉が印象的だった。公衆衛生に関する業務内容や、他の行政への働きかけを行っていることについて話を聞いていく中で、保健所は見えないところで私たちの豊かな生活のために力を尽くしてくれていることに気づいた。

4. 謝 辞

お忙しい中、橋本保健所の皆様には大変お世話になりました。地域のために尽力されている様子を実際に見ることができて、大変勉強になりました。研修を通して学んだことを生かして、将来地域に貢献できる医師になれるように精進していきたいと思います。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

(参考)

- i 地域医療情報システム（日本医師会） https://jmap.jp/cities/detail/medical_area/3003
- ii 伊都振興局 <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/130300/index.html>
- iii 橋本市観光情報 <http://www.city.hashimoto.lg.jp/hashimototaikan/index.html>

2 岩出保健所



■ 位置 >> 和歌山県岩出市高塚209

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

小林 太基

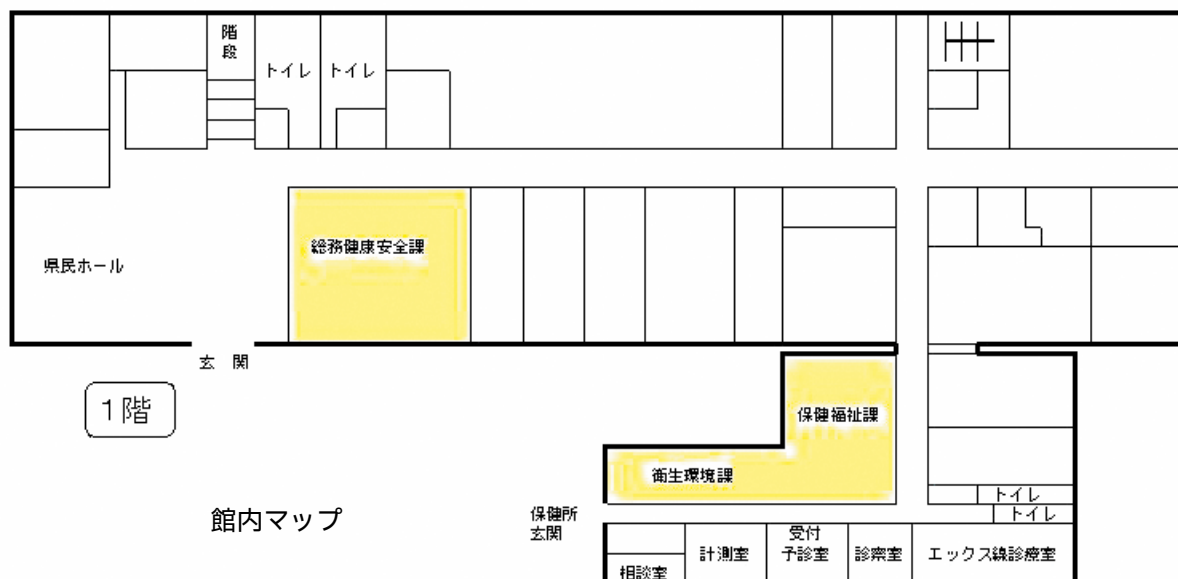
1. 実習施設とその地域の概要

実習施設：岩出保健所（和歌山県岩出市高塚209）

職員42人（総務グループ8、福祉グループ5、保健グループ6、健康グループ6、衛生環境グループ）

岩出市の人口：53,663人（令和3年4月1日現在）

岩出市の世帯数：22,503戸（令和3年4月現在）



2. 実習内容

●実習の時間割

9:00 ~ 9:30	実習の概要説明
9:30 ~ 12:00	問診、診察、理学療法士による診察の見学
12:00 ~ 13:00	カンファレンス
13:00 ~ 13:30	昼休憩
13:30 ~ 14:40	コロナ対策についての講演
14:40 ~ 15:40	待機時間
15:40 ~ 17:00	家庭訪問
17:00 ~ 17:30	所長への挨拶

●実習の内容

【問診、診察、理学療法士による診察の見学】

保健所内の部屋で行われた、脚部の発達に不安や障害がある幼児を医師、つくば医療センターの理学療法士が診察していたのを東京医療保健大学の生徒2人と合計3人でローテーションで見学した。

【カンファレンス】

午前中に行った診察の結果について、医師、理学療法士、保健所の職員で情報共有・今後の課題について会議していたのを見学した。

【コロナ対策についての講演】

所長による和歌山県の新型コロナウイルス感染症の発生状況についての講演を聞いた。

【家庭訪問】

パーキンソン病を患う方の家庭に赴き、難病医療費助成制度などの説明に同行した。

3. 考 察

脚部の発達に不安がある子供の診察では、大人と違い診る相手が3歳程度の子供のため、スムーズに進行しないこともあった。しかし、どの先生方も子供と目線を合わせていて、おもちゃを使いお願いという形で子供に歩いてもらったりしてその短時間の間に必要な情報を読み取っていた。子供相手には、診察の能力と同じくらいコミュニケーション能力も求められることが分かった。また、その後のカンファレンスでは、情報共有を行うことで様々な角度から事象をとらえることができ今後の方針がより適切なものとなるとともに、次回からのスムーズな対応にもつながると感じた。

パーキンソン病の患者さんの家庭の訪問では、その方のこれまでのこと、つらいことだけではなく楽しいこともあるなど人生について多く語って下さり、医師が診察するのは患者という抽象的なものではなく私と同じ1人の人間であると強く感じた。また、患者さんだけではなくその家族の方も想像を絶するほどの苦勞をしているということも知ることができた。

4. 謝 辞

この度は、このコロナ禍の中、日夜対応に当たって下さっている中で、私たちにこのような機会を与えてくださってありがとうございました。まだまだ医学に関する専門的な知識は身につけていませんが、今回の保健所実習を通じて、漠然としたイメージしか持っていなかった保健所の仕事について理解を深められたと思います。医学部生としては、これまで深く考えずに使っていた「患者さんとの接し方」について深く考える良い機会となりました。今後は、知識だけではなく実際の現場を知り、より良い医師を目指して努力していきます。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

中西 晴奈加

1. 実習施設とその地域の概要

岩出保健所の職員数は42名であり、総務福祉課、保健課、衛生環境課の3つの部署から成り立つ。総務福祉課では、生活保護や児童福祉などの業務を行っており、保健課では、感染症予防や難病対策などの業務を行っている。また、衛生環境課では、食品衛生や生活衛生、地球環境保全などの業務を行っている。岩出保健所の管轄区域は、紀の川市と岩出市であり、面積は県面積の約5.6%に当たる。人口は、令和3年4月1日時点で111703人と県全体の12.3%を

占めている。那賀地方には数多くの史跡や紀の川や貴志川が育んだ肥沃な平野があり、その一方で、関西国際空港から約30kmの至近距離に位置し、和歌山県の表玄関として発展する大きな可能性を秘めた地域でもある。

2. 実習内容

午前中は、保健所研修の目標と内容、保健所の業務についての説明を受けた後、ALSの患者さんの家庭訪問をした。午後は、保健所長の方から保健所の新型コロナウイルス感染症対応について、衛生環境課の方から衛生環境課の業務について（食中毒発生事例への対応や、薬物乱用防止対策）教えていただいた。また、医療と介護の連携推進事業についての病院部会のweb会議に保健士の方と一緒に出席した。ALSの患者さんの家庭訪問では、患者さんの体調の変化について話を聞いたり、より快適に過ごすための様々な工夫（簡易トイレに座りやすくするためにトイレの高さを調節するなど）について今実際に行っていることを聞いたり、また新しく生じた不具合をどうやって改善するか、家族の方たちと考えたりした。医療と介護の連携推進事業病院部会会議では、那賀地方の病院の主に看護師の方々が身寄りのない方への関わりや、退院支援に関して意見を出し合って話し合っていた。

3. 考 察

実習を通して、保健所は医療はもちろんのこと、福祉や公共衛生など、業務が多岐にわたることを感じた。また、患者さんの家庭訪問も保健所の業務の1つであることを知って驚いた。家庭訪問をして、ベッドやトイレ、車いすなど様々なところのユニークな工夫がとても興味深かった。また、台風などのあらかじめ予想できる災害がおこるときは、事前に病院に入院しておくなど様々なことを考えていて感心した。地震がきたときはどう行動すべきか、介護している奥さんの体調が悪くなったらどうするかなど難しい問題がたくさんあることも知った。また、病院部会会議の話し合いを聞いて、各病院によって問題解決の仕方や、対策方法が異なることが分かった。

4. 謝 辞

今回の実習では、保健所長や衛生環境課の課長、保健所職員の方々からたくさんのことを学ぶことができました。新型コロナウイルス感染症の対応などでお忙しい中、時間を作ってくださり本当にありがとうございました。

3 湯浅保健所



■ 位置 >> 和歌山県有田郡湯浅町湯浅 2355 - 1

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

石田 聖葉

1. 実習施設とその地域の概要

実習先である有田振興局健康福祉部（湯浅保健所）のある湯浅町は和歌山県中部に位置する人口11,688人（令和2年10月時点）、面積20.79km²の小さな町で、温暖な気候を生かした柑橘類の栽培が盛んである。和歌山県で唯一重要伝統的建造物群保存地区があり、伝統的な建物が並ぶ通りには醸造関連の町屋や土蔵が残されている。日本食に欠かせない醤油醸造の発祥の地といわれ今でも昔ながらの製法で醤油造りを行う店もある。

実習させていただいた有田振興局健康福祉部（湯浅保健所）は有田市、湯浅町、広川町、有田川町を管轄している。総務福祉課、保健課、衛生環境課の3つがあり、総務福祉課では生活

保護や高齢者福祉対策、保健課では感染症予防対策や精神保健福祉対策、衛生環境課では食品衛生対策や薬物乱用防止等、住民の健康の維持増進に関することに幅広く取り組まれている。現在は新型コロナウイルス感染者の濃厚接触者に対するPCR検査などもされている。

2. 実習内容

《時間割》

- 9:00 朝礼
- 9:00～10:30 PCR検査の見学
- 10:30～11:30 松本所長のお話
- 13:00～14:00 難病患者さんのお話
- 15:00～16:30 難病患者さん宅へ訪問

《詳細》

○朝礼

湯浅保健所には難病、精神保健、福祉と複数分野があり、朝9:00のチャイムと同時にそれぞれの分野のその日の予定を他分野にも報告しあっていた。そのタイミングで私も自己紹介させていただいた。

○PCR検査の見学

新型コロナウイルス感染者の濃厚接触者を保健所にお呼びしてドライブスルー形式でPCR検査を行っている様子を少し離れた室内から見学した。検査は松本所長が行っており、保健所職員が検査後に家での過ごし方や保健所への連絡方法などの説明を一人ずつ丁寧にしている様子が見られた。

○松本所長のお話

保健所の使命について松本所長がお話してくださった。保健所の事業については地域保健法第6条に14項目記されているが、その中でも第一項「地域保健に関する思想の普及及び向上に関する事項」を大切にしているとのことだった。つまり、健康の重要性や必要性をよく確認し、社会に住んでいる人々が自分の健康の維持増進のために必要なことを生活に取り入れ、実行していくことが必要であり、公衆衛生活動は町ぐるみ村ぐるみの活動であるべきだということだ。医療機関と保健所とで健康へのアプローチに違いがあるというお話もあった。医療機関が主にするのはハイリスクアプローチと呼ばれるもので、これは発症するリスクを持った人に対し働きかけることである。一方保健所では主にポピュレーションアプローチを行っている。これは、リスクの有無に関わらず多くの人が少しずつリスクの要因を軽減させることで集団全体に好影響をもたらすことだ。

○難病患者さんのお話

湯浅保健所管内にいらっしゃる難病患者さんに対して保健所がどのような取り組みをしているのかというお話を伺った。自宅で過ごされている患者さんは生命維持に必要な医療機器をつけていたり、一人での移動が難しい。そこで、避難の際に支援が必要な方を把握し名簿の作成をしているようだ。また、避難時その患者さんに必要な医療機器や機器のバッテリーに関する情報、かかりつけ医や家族など関係者連絡リストなどをまとめた災害時個別支援計画という冊子を一人一人に丁寧に作成していた。

○難病患者さん宅への訪問

筋ジストロフィーで、自宅で過ごされている患者さんを訪ねた。ご両親と過ごされており、最近になって訪問看護師やヘルパーに来てもらうようになったそうだ。ヘルパーが来るようになってご両親の負担は軽減したそうだが、一度に滞在する時間が短いことと、医療行為である呼吸器の付け外しはヘルパーにはできないということに困っているようだった。また、複数のサービスを受けることはできるけれど、その分相談先、連絡先も複数になってしまってややこしいとおっしゃっていた。一緒に訪問させていただいた保健所の職員と患者家族との会話の様子を見ていると、日ごろからそのような悩みをよく聞いて相談に乗っているのだろうと思われる雰囲気だった。

3. 考 察

病気だけではなく、精神状態や生活環境等、人の健康には様々な要素が関係しており、そのような健康に関することについて幅広く対応して取り組んでいるのが保健所なのだと感じた。空き時間に精神保健に関する資料もいくつか見せていただいたが、認知症、アルコール等の依存、ひきこもり、自殺関連、こころの病気や障害に関する相談を電話や家庭訪問で1年間に993件受けたそうだ。精神保健に限ってもこれだけ多様な相談が寄せられているので、保健所全体で見ればさらに幅広く相談を受けていると想像できる。何かに専門的というわけではないからこそ地域住民が気軽に相談できる機関になっているのではないかと思う。

管内の難病患者さんに対する避難行動支援に関するお話を伺った際、患者さん宅で電源の確保が難しくなった時のため、事前にいくつかの大きな病院に許可をとって緊急時に訪ねられるようにしているというお話もあった。このように保健所は住民と病院等の施設とをつなぐ役割をしている。病院側も緊急時にはこのような患者さんが来るかもしれないと事前に分かるので混乱を防ぐことができそうで、保健所の働きによって支えられている部分があるのだと分かった。

4. 謝 辞

新型コロナウイルスの影響もありお忙しい中時間を割いていただき、貴重な経験をさせていただいた有田振興局健康福祉部（湯浅保健所）の松本所長、職員みなさまに深く感謝申し上げます。

げます。保健所で働く職員のみなさまの様子や管内の患者さんやご家族の様子を、目で見て耳で聞いて得られたものを全て言葉にするのは難しいですが、本当に大切に大きな経験になりました。またご自宅に温かく迎えてくださった津田さんご家族にも深く謝意を表します。そしてこのような貴重な機会を与えてくださった地域医療支援センターのみなさま、本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

中西 歩登

1. 実習施設とその地域の概要

湯浅町は人口約1万2千人、面積20.79km²の和歌山県有田郡にある町の1つである¹。また有田振興局健康福祉部（湯浅保健所）は総務や生活保護などを担当する総務・保護グループと高齢者・障害者などの福祉を担当する福祉グループからなる総務福祉課、食品衛生や生活衛生などを担当する衛生環境グループからなる衛生環境課、各種感染症の予防や動向調査などを担当する保健グループと障害者の支援などを担当する健康グループからなる保健課の3つの課に分かれている。

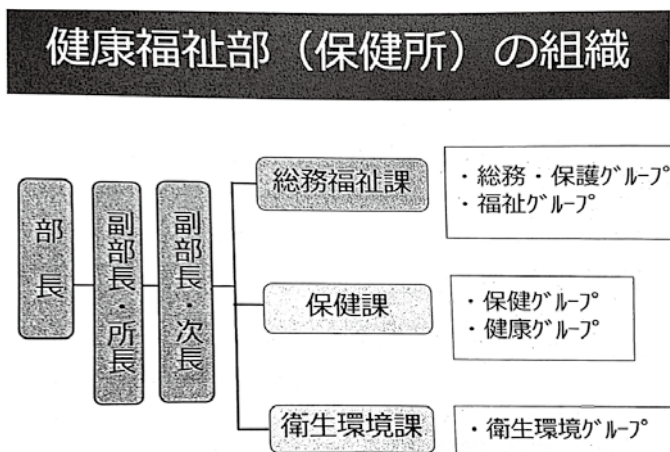


図1 湯浅保健所の組織図²

2. 実習内容

●湯浅保健所所長松本政信先生からのお話（9:00～9:30）

保健所の事業は地域保健法に則っていて、特に「地域保健に関する思想の普及及び向上」「健康危機管理」「対人保健サービス」の3つが重要であると教わった。また、公衆衛生活動の意義、日本の生活環境の変化による生活習慣病の増加についても教わった。

●精神鑑定の現場へと同行（9:30～12:30）

実習日の前日、警察に身柄を確保され、精神保健福祉法第二十三条³（以下は精神保健福祉法の条項である）により湯浅保健所に通報があった湯浅警察署の保護室に保護されている身元不明の方（以下Aとする）を迎えに行った。精神鑑定の必要性があったため湯浅警察署から県立こころの医療センターへと連れて行き、第二十七条⁴に則り、精神科医がAを診断している場面を見学した。その後、Aを第三十三条の七⁵の応急入院とするか第三十三条³の市町村長同意の入院にするかの連絡をしている場面を見学した。（記載している法律は保健師の方のお話などを参考にしているので、全て正しいとは限らない）

3. 考 察

今日、日本では医療における「インフォームド・コンセント」を行うことが当たり前となっている。これは「患者側の意見に沿って医療を行うべきだ」という思想に拠っている。今回の実習は非常に稀なケースであったが、患者を強制的に入院させることについての一連の流れを見学させてもらった。この実習から患者の状況においてはインフォームド・コンセントを行わず、強制手段も取らざるを得ないこともあることを学んだ。また、実習中には保健師の方が医師だけではなく、警察官の方や看護師の方、役場の方と綿密に連絡を取りつつ仕事をしていたのを見学させていただき、チーム医療は直接医療に関係する方々だけではなく、その周囲の方々との連携もあって初めてできるものであると新たに認識することができた。また、精神保健福祉法において様々な条項により手続きが定められていて、複雑な状況でも何をすればよいのかを把握している必要があり、様々な知識を要していると分かった。

4. 謝 辞

湯浅保健所の皆様、コロナウイルスのデルタ株が流行し、大変ご多忙な時に実習を受け入れていただき、拝謝申し上げます。また、半日同行して下さった坂本様には難しい事案に同行させていただき、医療のリアルな現場を見せてくださり大変御世話になりました。今後もコロナウイルスの感染者が増加していくなどの油断ができない状況、多忙な日々が続くと思われませんが、御自愛ください。

参考文献

1. 湯浅町役場公式ホームページ | ゆあさちょう | 暮らしの情報 | 観光情報 | 和歌山県有田郡 (town.yuasa.wakayama.jp)
2. 「総務福祉課の業務」 奥田幾久子様の資料より抜粋
3. 精神保健福祉法第二十三条

警察官は、職務を執行するに当たり、異常な挙動その他周囲の事情から判断して、精神障害のために自身を傷つけ又は他人に害を及ぼすおそれがあると認められる者を発見したときは、直ちに、その旨を、最寄りの保健所長を経て都道府県知事に通報しなければならない。

4. 精神保健福祉法第二十七条1

都道府県知事は、申請、通報又は届出のあつた者について調査の上必要があると認めるときは、その指定する指定医をして診察をさせなければならない。

5. 精神保健福祉法第三十三条の七

厚生労働大臣の定める基準に適合するものとして都道府県知事が指定する精神科病院の管理者は、医療及び保護の依頼があつた者について、急速を要し、その家族等の同意を得ることができない場合において、本人の同意がなくても、七十二時間を限り、その者を入院させることができる。

6. 精神保健福祉法第三十三条3

精神科病院の管理者は、その家族等がない場合又はその家族等の全員がその意思を表示することができない場合において、その者の居住地（居住地がないか、又は明らかでないときは、その者の現在地。）を管轄する市町村長の同意があるときは、本人の同意がなくてもその者を入院させることができる。

4 御坊保健所



■ 位置 >> 和歌山県御坊市湯川町財部 859 - 2

和歌山県立医科大学医学部地域医療枠1年生

東本 胡桃

1. 実習施設とその地域の概要

今回見学させていただいた御坊保健所では、日高振興局保健福祉部の総務福祉課、保健課、衛生環境課の3つの課があり、さらにグループにより分割し、3課5グループで保健所の業務を行っている。御坊保健所は和歌山県のほぼ中央に位置し、御坊市、由良町、日高町、美浜町、日高川町、印南町の1市5町を管轄している。地域住民の健康の保持、増進や公衆衛生の向上のために、地域住民の健康づくりの拠点としての役割を担っており、感染症対策をはじめ高齢者や児童への福祉支援、生活環境の衛生対策、難病患者の支援など多岐にわたる業務を行っている。

2. 実習内容

(午前)

- ① 挨拶
- ② 新型コロナウイルス感染症のPCR検査に用いる検体採取現場の見学、抗原検査の体験
実際にガウンやフェイスシールドを着用し、PCR検査を受けに来訪した方々の検体採取の様子を見学させていただき、その後自ら抗原検査用の検体を採取させていただき検査キットを用いて、抗原検査を行った。
- ③ 保健所の役割等に関する説明
新谷所長より保健所全体の役割や主な業務内容、感染症対策の業務について説明していただいた。

----- 昼休憩 -----

(午後)

- ④ 衛生環境課の業務に関する説明
赤坂課長より御坊保健所の衛生環境課の業務内容や役割について説明していただいた。
- ⑤ DOTSの業務の見学
DOTSとは結核患者の服薬を見守り、治療の支援を行うことである。結核治療では主に4種類の薬を2カ月、その後も2～3種類の薬を治療開始から9カ月後まで服用し続けなければならない。しかし、患者さんが自己判断により途中で服薬をやめると薬剤耐性菌が生じ、それが他人に感染すると薬が効かないため結核の治療が非常に困難になってしまう。それを防止するために保健所では結核患者さんへ面接や訪問を行うことで、患者さんが最後まで服薬を続けられるよう支援を行っている。
今回は、実際に結核患者さんのご自宅に伺わせていただき、服薬や症状の経過などを確認するところを見学させていただいた。
- ⑥ 総務福祉課の業務に関する説明
中西課長より御坊保健所の総務福祉課の業務内容や役割等について説明していただいた。
- ⑦ 挨拶

3. 考 察

今まで保健所の業務といえば近日流行している新型コロナウイルス感染症のPCR検査を行ったり、母子健康対策を行っているというような浅い認識しかなく、どのような業務を行っているのか詳しく知らなかった。しかし、今回の実習で感染症対策や母子健康対策だけでなく、高齢者や障害者、児童に対する福祉対策や食中毒対策をはじめとした衛生対策、廃棄物や公害に対する対策、精神保健福祉対策など多岐にわたることを知った。地域住民の方々が健康に安心して暮らすことができるように保健所が地域の健康づくりの拠点となっていることが考えられる。

また、近日流行している新型コロナウイルス感染症の対策に関してもPCR検査をはじめ、疫学調査など様々なことを行っているのを見学させていただき、真夏の気温が高い中でもガウンやフェイスシールドを着用して、検査を受けに来訪した方々一人一人に声掛けをしながら検査を行う大変さが身にしみて感じられた。私自身も抗原検査を実際に体験させていただき、貴重な経験をさせていただいたと思う。

午後から、DOTSの業務を見学させていただき、結核の患者さんの服薬支援を行うために保健所が中心となって、医療機関と患者さんや患者さんの家族と連携して支援を行っていることが分かった。結核の治療に用いられる薬には副作用もあり、長期間に渡って服薬を続けることは苦痛になることもある。また、患者さんによっては認知機能が低下し、服薬を忘れてしまうこともある。患者さんのつらい気持ちを理解し、精神的なケアも行いながら治療が終了するまで支援を行っているのを見て、結核の治療には医療機関だけではなく、保健所が患者さんの治療のための重要な仕事を担っていると理解した。

今回の実習の前は、保健所の機能や業務についてよく理解していなかったが、実習を通して保健所が地域住民の健康の維持・増進のため、住民の一人一人が安心して快適な生活を送ることができるよう多岐にわたる業務を請け負っているとわかり、地域における保健所の重要性について知り、保健所が地域にとって必要不可欠な存在であると理解することができたと感じる。

4. 謝 辞

最後に、今回大変お忙しい中私たちが保健所の役割や業務について知るために、貴重な時間を割いていただき、新谷所長をはじめ御坊保健所の職員の方々に厚くお礼申し上げます。今回の実習で学んだことを今後役立てていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科1年生

吉益 実咲

1. 実習施設とその地域の概要

今回の実習で私が訪れたのは和歌山県御坊市湯川町にある御坊保健所である。保健所には健康福祉部長、企画員（保健所長）、副部長がいらっしゃって、生活保護の問題や、福祉の問題などを扱う総務福祉課、地域医療体制の整備や健康づくりなどを扱う保健課、食の安全や公害対策などを行う衛生環境課に分かれている。御坊保健所の管内は、御坊市、美浜町、日高町、由良町、印南町、日高川町で和歌山県のほぼ中央に位置している。気候は黒潮の影響を受け、一般に温暖で雨量も多いが、海岸部と山間部ではかなり異なる気象条件を有している。御坊保健所が位置する御坊市の人口は22,983人で管内の人口は59,521人である。保健所には、医師、

薬剤師、保健師、獣医師、管理栄養士などその他様々な職種の方々が働いている。

2. 実習内容

① 朝礼でのあいさつ

② 保健所長である新谷先生からの保健所医師に関する説明

公衆衛生医師の方々は、県民の健康づくりの支援や地域の健康課題の把握・対応、生活環境の確保など県民の健康増進や予防医学の実践など様々な業務を行っており、関係団体と協働で地域の保健医療のシステムを作り上げる重要な役割を担っていることが分かった。

③ コロナ濃厚接触者や接触者のPCRを行っている現場の見学と抗原検査の体験

感染防護具（キャップ、フェイスシールド、ガウン、手袋）を装着し、実際に検査を受けに来られた方の抗原を採取し、検査にかけ、結果をその方に報告するという体験をした。抗原採取の仕方、検査のやり方を学ぶとともに、感染防護具の脱ぎ方なども丁寧に教えていただいた。

④ 保健所長である新谷先生からの感染症に関する説明

「感染症法」という制定の考え方や、感染症類型を学んだ。感染症は1類から5類まであり、1類の方が危険性が高くなっている。1類感染症にはエボラ出血熱などで、2類には、コロナウイルスや結核があり、状況に応じて入院するという措置を施す。5類はRSウイルス感染症やインフルエンザなどが挙げられる。また、新型コロナウイルス感染症の方の基本情報や臨床情報調査票なども見せていただいた。そこには、発症14日前からの患者さんの行動の様子が細かく記されていることが分かった。

⑤ 健康福祉部赤坂さんからの衛生環境に関する説明

衛生環境グループの食の安全、動物愛護・管理、狂犬病予防、廃棄物対策、公害対策、薬事、毒物に関する説明をしていただいた。

⑥ 保健課熊谷さんによる結核対策に関する説明とDOTSの見学

結核とは、結核菌を吸い込むことによってうつる感染症である。しかし、結核菌に感染してもほとんど発病せず、体のなかで菌が増えたときだけ発病する。結核になった人は、耐性菌を出現させないようにするため、長期間の服薬の治療が必要である。そこで、患者さんが結核を治癒するため保健所は確実な服薬のための患者支援であるDOTSを行っている。DOTSの活動としては、実際に在宅で結核の治療として服薬されている患者さんの家に行き、薬の飲み忘れがないかのチェックや、健康観察などを行う。実際に、DOTSを見学して、医療と保健所、行政など枠をこえた協働が大切であると実感した。

⑦ 副部長である健康保健福祉部の中西さんからの総務福祉課に関する説明

生活保護、障害者福祉対策、高齢者の福祉・保健、母子・児童福祉に関する説明をしていただいた。

3. 考 察

今回保健所実習を行い、保健所にはさまざまな専門的知識を持った職種の方々が在籍し、私たちの生活や環境、健康など生きていく上で必要なことの支援をしていることが分かった。私がこの実習を行って学んだことは、地域ぐるみでの連携が必要であるということである。保健所は地域の様々な機関と協働している。このような連携が地域でおこる様々な問題を解決し、地域の人々が暮らしやすい街づくりができるのではないかと思った。

4. 謝 辞

コロナウイルスが蔓延し、様々な機関がひっ迫している中、私たちに保健所実習という機会を与えていただき本当にありがとうございました。今回の実習で、保健所の皆さんのお仕事などを経験し、見学することができたことは、私にとってとても貴重な経験となりました。私が将来医師になったときは、ここで学んだことを活かして頑張っていきたいと思います。この実習を実行していただいた地域医療支援センターの皆様、そして保健所の皆様、本当にありがとうございました。

(参考資料)

和歌山県人口調査（県調査統計課：令和2年4月1日）

5 新宮保健所



■ 位置 >> 和歌山県新宮市緑ヶ丘2丁目4-8

和歌山県立医科大学医学部地域医療科1年生

樋上 和真

1. 実習施設とその地域の概要

実習をさせていただいた新宮保健所は、東牟婁振興局健康福祉部の施設内にあり、新宮市と東牟婁郡那智勝浦町、太地町、北山村の1市2町1村を串本支所と分担して所轄している。新宮保健所内には総務福祉課、保健課、衛生環境課の3つの課がありそれぞれの業務を担当している。所轄する地域の総人口は約44,000人（令和元年10月時点）であり、人口構造は高齢者が多く、若者は少ない。また、紀伊半島の南東部に位置しており、熊野川をはさんで三重県と接しており、北山村全域と新宮市の一部が三重県と奈良県に囲まれた飛び地となっている。気候は暖流である黒潮の影響で温暖多雨であり、面積の90%以上が森林となっている。保健所が

ある新宮市は熊野川の河口に位置する都市である。観光地は熊野速玉大社があり、平成16年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録され、大きな注目を集めている。

2. 実習内容

まず、保健所の車庫で、新型コロナウイルス感染症患者の濃厚接触者と判断された方のPCR検査のドライブスルー方式での検体採取を見学させていただいた。次に東牟婁振興局健康福祉部長の杉本さんにお会いした。そして、各課長の方にお話を聞いたり介護保険制度についての説明を聞いたりした後に、環境衛生課長である堀内さんの飲食店に対するコロナ対策の認証審査に同行させていただいた。店頭の張り紙の文言や客同士の距離、手指消毒用のアルコールの設置場所やBGMの大きさなど非常に細かく指導されていたのが印象的だった。

午後は環境衛生課の職員の方がごみのポイ捨て対策として、太地町にある夏山地方の緑地で防犯カメラの設置や電池の交換をするのを見学させていただいた。防犯カメラは「監視されている」と意識させることで、ポイ捨てを抑止する効果を狙っているようだ。その帰りに新宮市の熊野川沿いの国道のポイ捨ての多い箇所を見学した。この国道は昔からの名残で車を止めるスペースが多いが、そこでポイ捨てが発生しやすいという。人は「ごみのある所にはごみを捨てたくなる」そうなので、それを防止するためにごみを見つけるとこまめに職員の方が回収されていた。保健所に帰った後には獣医の方に地域猫の取り組みについてお話を伺った。猫は繁殖のスピードが非常に早く、保健所で野良猫や迷子猫を引き取りきれないため、不妊去勢手術を行うことで猫の数を減らすとともに猫も寿命を全うできるという地域猫の取り組みは、人と猫の双方にとって良い解決策として画期的だなと感じた。最後に保健所での新型コロナウイルスに感染された方への対応の最前線を見学させていただいた。感染された方や濃厚接触者の方の状況が一目で分かるように壁やホワイトボード一面に情報が書かれた模造紙が貼られ、職員の方がそれぞれの役割に全力を注ぎ、一丸となって働いておられた。

3. 考 察

今回の実習の中で1番印象に残っているのは杉本さんの「新宮のような地方でも人々の暮らしがあってそれを私たちはきちんと支援している」という言葉だった。人口の少ない地方でもポイ捨て、新型コロナ、健康、介護関係など様々な問題が存在し、それらの事柄に保健所の担当課が防犯カメラの設置、飲食店でのコロナ対応の認証制度、健康診断、介護保険制度の普及などで丁寧に対応していた。これまで保健所の業務に漠然としたイメージしか持っていなかったため今回の実習は大変勉強になった。新宮保健所管内で新型コロナウイルスの感染拡大が拡大する中、ぎりぎりの人数でいかに工夫して激務をこなしているのかを目の当たりにした。和田先生のお話の中に、台湾におけるコロナ対応に関することがあったが、日本もコロナ対応に関して台湾のような、濃厚接触者の洗い出しなどのコンピューター上で簡単に情報を分析・共

有ができる仕組みがあれば、より効率的に作業を進められるのではないかと感じた。

4. 謝 辞

最後になりましたが、お忙しい中私たちのために様々なことをお教えくださった和田所長、新宮保健所の皆様、大変お世話になりました。非常に有意義な実習となりました。保健所の業務のことはもちろんのこと、私が初めて訪れた新宮の魅力も存分に紹介していただきとても嬉しかったです。また機会があればぜひ訪れたいと思います。短い期間ではありましたが、本当にありがとうございました。

和歌山県立医科大学医学部地域医療科1年生

山本 有美恵

1. 実習施設とその地域の概要

今回研修させていただいた新宮保健所は、新宮市と東牟婁郡市町村を串本支所と分担して所管している、東牟婁振興局健康福祉部の組織内にある。総務福祉課、保健課、衛生環境課の三つの課があり、保健課が保健所の核となっている。

所管区域は新宮市、東牟婁郡那智勝浦町、太地町、北山村の1市2町1村で、総面積492.55平方キロメートル、人口44,793人（令和1年10月時点）であり、高齢化や過疎化が心配されている。

紀伊半島の南東部に位置し、北は果無山脈を境に奈良県、東は熊野川を挟み三重県と接している。北山村と新宮市の一部は三重県と奈良県に囲まれた飛び地である。

暖流黒潮が流れるため温暖多雨であり、降雪はまれで、面積の90%は森林である。

観光地としては、平成16年に世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」があり、熊野三山や熊野古道が全国的に注目されている。

2. 実習内容

9:00-9:45	新宮保健所長、和田先生に挨拶 ドライブスルー方式によるPCR検査の検体採取見学 東牟婁振興局健康福祉部長、杉本さんに挨拶 建物内見学
9:45-10:40	飲食店へのコロナ対策認証審査見学
10:40-12:00	介護保険について、保健所業務についての講義
12:00-13:00	昼食

13:00-13:20	環境衛生課の業務についての講義
13:20-15:15	不法投棄防止の監視カメラの電池交換、取り付け見学 熊野川散策
16:00-16:30	動物愛護についての講義
16:30-17:00	新型コロナウイルス感染症対策の現場見学
17:00	挨拶

ドライブスルー方式によるPCR検査は、濃厚接触者に行われる。検体は採取後3時間後には結果が分かるそうだ。外で行うことへの受診者の抵抗や、近隣からの苦情があることから、公用車の駐車場で風通しを良くして検査を行っていた。

飲食店へのコロナ対策の認証審査では、定められたガイドラインの項目を1つ1つ丁寧に確認し、満たされていない項目があればすぐに改善するように促していた。全ての項目を満たせば認証されるが、取り消されることもある。

不法投棄防止の監視カメラは太地町の夏山地方の緑地で3カ所につけられており、不法投棄の犯人特定はもちろん、監視しているということを表すことでそもそもの投棄防止を図ったり、猫の遺棄を抑制したりするものである。1つでもゴミが捨てられているとその場所に捨てて良いと思う人がでてくるため、職員の方は、少しのゴミでも回収するようにしているそうだ。

その後、市街地から少し離れた所にある、熊野川に連れて行っていただいた。市街地からは想像がつかない、美しい大自然が広がっていた。

獣医師の方からは野良犬、野良猫が増えないようにするための対策について話をしていた。特に野良猫の数は今でも多く、不妊・去勢手術の実施やトイレの設置などを促す「地域猫対策」や、子猫を離乳まで育てる「ミルクボランティア」の募集を行っているそうだ。

新型コロナウイルス感染症対策の現場では感染者を徹底的に調べた紙が、共有のためボードに貼り付けられていた。複数の証言をあわせて行動をより詳しく調査する。同居人がいる場合は、家系図の作成もする。運転できない人の搬送も行っている。重症化した場合は、田辺市の病院や日赤病院に搬送されるそうだ。

3. 考 察

今回の研修で、今までほとんど知らなかった保健所の業務について詳しく知ることができた。健康福祉部長の杉本さんは、人手不足のため、いかに工夫して業務を行っているかということや、地方でも人々の暮らしがあるということを知ってほしいとおっしゃっていたが、まさにそのとおりで、私が想像していた以上に多くの業務を数少ない人手でこなしており、地域を支えるために働く人の大変さを実感した。高齢化が進む地域で重大な役割を果たす介護保険に関することから、地域の野良猫の抑制まで、その幅広い業務内容に驚いた。また、新型コロナウイ

ルス感染対策の現場を実際に見て、感染拡大を防ぐためにどれだけの人手と時間がかかるかを感じた。テレビの報道の裏では分からない、地域の実態を知るのは貴重な体験であるし、医師以外の方々もどれだけ大変かが分かった。地域に関わる仕事をする人は、その地域をよく知る必要があるし、その地域に対して強い思い入れがあるように感じられた。

4. 謝 辞

最後になりましたが、お忙しい中、私達のために貴重なお時間を割いてくださった和田所長、新宮保健所の皆様には大変お世話になりました。非常に有意義な体験をすることができました。保健所の業務についてはもちろん、新宮市の魅力についても知ることができました。また伺う機会があると嬉しいです。今回学んだことをこれからに活かしていきたいと思います。短い時間でしたが本当にありがとうございました。

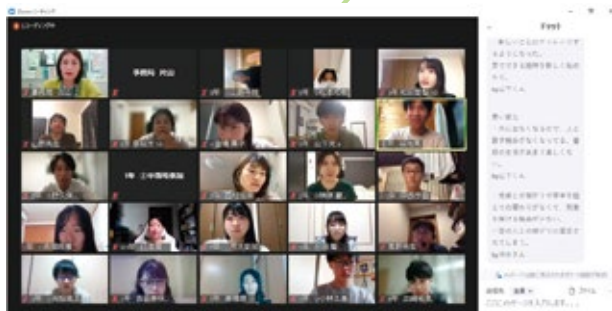
実習を終えた学生からの感想

●実習について（○保健所実習、◎病院・診療所実習）

- 強制入院等の医療のリアルな現場やコロナ対策本部の様子を実際に見られて良かった。
- 新型コロナウイルス感染拡大の中、ぎりぎりの人数でいかに工夫して激務をこなしているのかを目の当たりにした。
- ◎地域卒の先輩から学べたことで自分の将来像をはっきりイメージできた。
- ◎新型コロナウイルスの影響で机上での勉強が主となっていた中、実際の臨床現場を見ることができて大変貴重な経験となった。

●オンライン講演会・交流会について（○講演会、◎交流会、☆その他）

- 地域医療における臨床医のケーススタディについてお話が聞けて大変勉強になった。
- 論文作成方法について初めて聞いたので勉強になった。
- ◎貴重な講演や学年を超えた交流が楽しかったので、またこのような機会があれば嬉しい。
- ◎先輩医師や他学年の学生同士で貴重な交流ができてありがたかった。
- ◎2年生は実習に行けていないので、他学年の実習の感想を聞ける機会があって良かった。
- ◎上級生の方の実習の内容を知れて、これからの体験が楽しみになった。
- ◎コロナ禍で交流する機会がない中でこのような場を設けていただき、今後の臨床実習に参加するモチベーションの向上に繋がった。
- ☆昨年度から自治医大の学生との交流ができていないので、企画してもらえると嬉しい。





ホームページ・ <http://www.cmssc.jp/>



Facebook・ <https://www.facebook.com/W.CMSC>

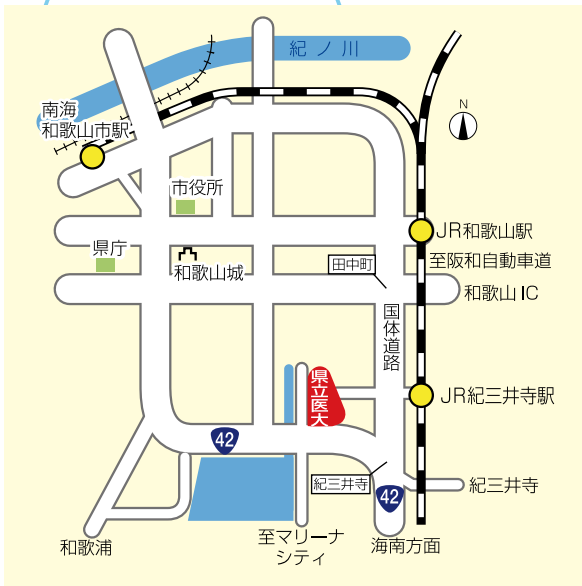
和歌山県地域医療支援センター



和歌山県 地域医療支援センター

〒641-8509
和歌山市紀三井寺811番地1
TEL：073-441-0845
FAX：073-441-0846

アクセス方法



- JR 紀三井寺駅 → 徒歩（約10分）
- JR 和歌山駅 → バス・タクシー
- 南海和歌山市駅 → バス・タクシー



- JR 和歌山駅
1番のりば「医大病院」行 約25分
2番のりば「医大病院」行 約30分
- 南海和歌山市駅
1番のりば「医大病院」行 約30分
8番のりば「医大病院」行 約30分
9番のりば「医大病院」行 約30分

令和3年10月 発行

発行 和歌山県立医科大学地域医療支援センター センター長・教授
和歌山県地域医療センター センター長

上野雅巳